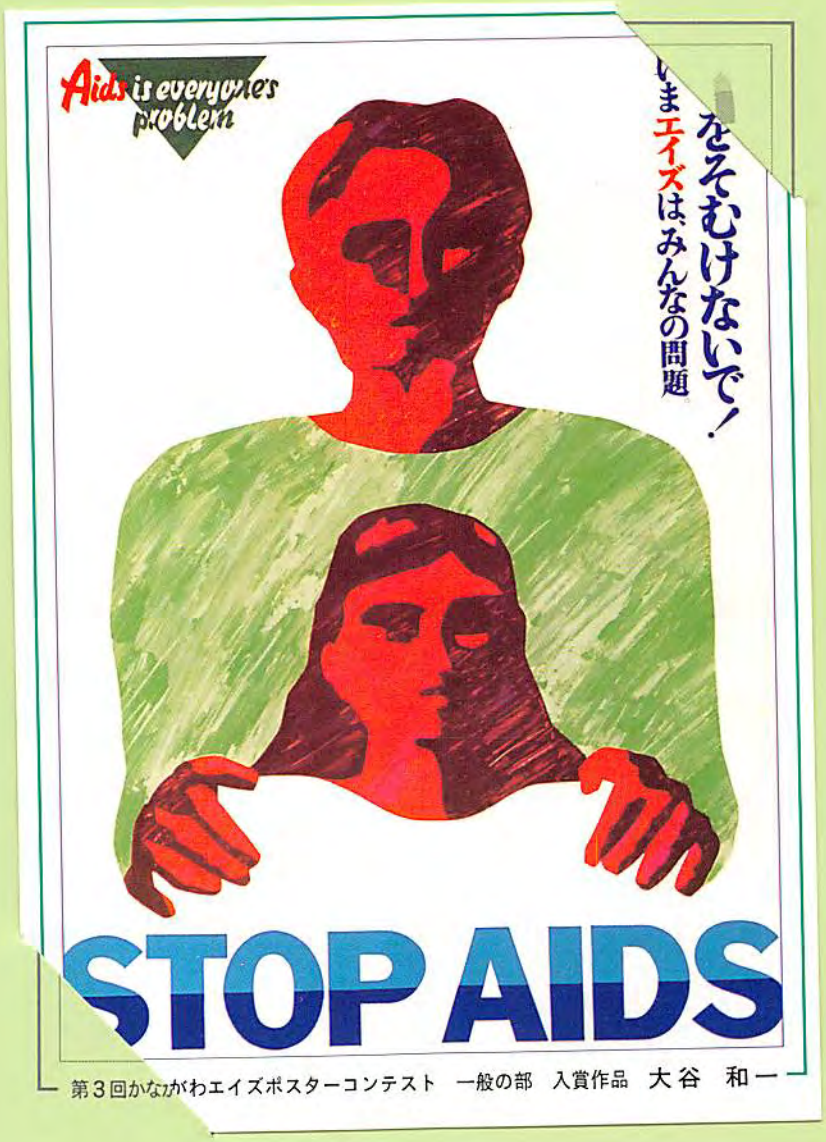
1995 AIDS文化フォーラム in 横浜

報告書



第3回かながわエイズポスターコンテスト　一般の部　入賞作品　大谷　和一

日時：1995年8月11日(金)～13日(日)

場所：(財)神奈川県国際交流協会会議室

主催：1995AIDS文化フォーラムin横浜組織委員会

共催：神奈川県　後援：横浜市／川崎市／横須賀市

1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜

実施報告書

目　次

1ページ　：ご挨拶
2　：「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実施要項
「ＡＩＤＳ文化フォーラム概要(第1回、1994年)」
3　：会場平面図、会場周辺図、同時開催行事、周辺行事
4　：記録写真
6　：「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実施報告
7　：実施報告プログラム
8　：プログラム総括表
9　：　企業とＡＩＤＳ
10　：　高校生の疑問に答えます－教育現場から－
11　：　生きる　－Positive　&　positive－
12　：　ＡＩＤＳと性の基礎知識　～知っておきたいセクシュアリティのこと～
13　：　ＨＩＶ／ＡＩＤＳ’９４～９５　未来に向けて
14　：　絵本で話そうＡＩＤＳ
15　：　ＨＩＶ感染者不当解雇訴訟
16　：　トランスジェンダーのためのＡＩＤＳ講座
17　：　SAY　ACADEMY ～夏の陣～「近ごろの若いもんは・・・」
18　：　女性とＡＩＤＳ
19　：　いやしのエイズワークショップ
20　：　コンドームあれこれ
21　：　電話によるＡＩＤＳ相談のデモンストレーション　－ロールプレイによる－
22　：　ＰＷＡ／Ｈのケアー・サポート
23　：　感染者をどう思いますか？　～感染者とのトーク＆トーク～
24　：　母親が語る－薬害ＡＩＤＳと家族－
25　：　朗読ワークショップ
26　：　心とからだを感じるワーク
27　：　薬害エイズ－知られざる大量殺戮の構図－
28　：　Ｈ．Ｉ．Ｖｏｉｃｅ劇場
29　：　生活者としてのエイズ
30　：　キリスト者としてＡＩＤＳを考える
31　：　男と女の性教育
32　：　プライマリケアとＡＩＤＳ
33　：　アウトリーチが語るＡＩＤＳの啓発活動について
34　：　ＨＩＶ診療と看護のコツ
35　：　エイズ・教育・人権
36　：　エイズ時代の愛と性
37　：　ＡＩＤＳと同性愛
38　：　在宅・地域ケアの一環としてのバディ
39　：　エイズを生きる－LOVE of LIFE with AIDS－（写真展）
40　：ＡＩＤＳ文化フォーラムへの取り組み－かながわエイズボランティア育成講座－
41　：ボランティア育成講座の概要
42　：実行委員からのメッセージ
44
～　：資料編
53

ご　挨　拶

昨年８月１１日～１３日までの３日間、「ともに生きる」というテーマで「1995 AIDS 文化フォーラム in 横浜」が㈶神奈川県国際交流協会会議室において開催されました。３日間に入場した人々は、延べ２，２００人に達しました。その参加者も小学生から高齢者までと幅広く、また、北は北海道、南は鹿児島と遠隔地から参加されました。中には前日の飛行機最終便で来られて３日間このフォーラムのために宿を取られ参加された福岡の方もいました。

半年をおきまして、参加団体の方々のご協力により、この度、「1995 AIDS 文化フォーラム in 横浜」の報告書を作成する運びとなりました。プログラム内容は多種多様にわたり、生きる、医療とＡＩＤＳ、心とＡＩＤＳ、ボランティアとＡＩＤＳ、社会とＡＩＤＳ、セクシュアリィティとＡＩＤＳ、宗教とＡＩＤＳ、文化とＡＩＤＳ、教育とＡＩＤＳ、薬害とＡＩＤＳ、企業とＡＩＤＳ、人権とＡＩＤＳ、の１２のジャンル、３０の講演会等と、土橋正之氏の写真展「エイズを生きる」でした。

昨年と異なり、国際会議等のイベントがなかったため参加者が少ないのではと心配されましたが、昨年にも勝る参加者がありました。

この期間中における会場運営は延べ１７９名によるボランティアによって支えられました。また、このフォーラムのために組織委員、実行委員として１７名がボランティアとしてかかわりました。加えて、会場を無料提供して下さった㈶神奈川県国際交流協会、共催の神奈川県、後援の横浜市、川崎市、横須賀市が陰から支えて下さいました。市民の手による市民のための手づくりによる市民文化フォーラムは、多くの人々や団体・行政の賛同を得て実施することができました。３日間のフォーラムが手弁当で行われたことは大変なことでしたが、それだけに成功裡に終了した喜びをすべての方々と分かち合うことができました。心より感謝申し上げます。

このようなフォーラムを機会に参加された方がさらなるネットワークを形成し、「ともに生きる」社会づくりが進むことを願ってやみません。皆様の今後の活動に期待しながら「1995 AIDS 文化フォーラム in 横浜」の報告とさせていただきます。

1996年3月1日

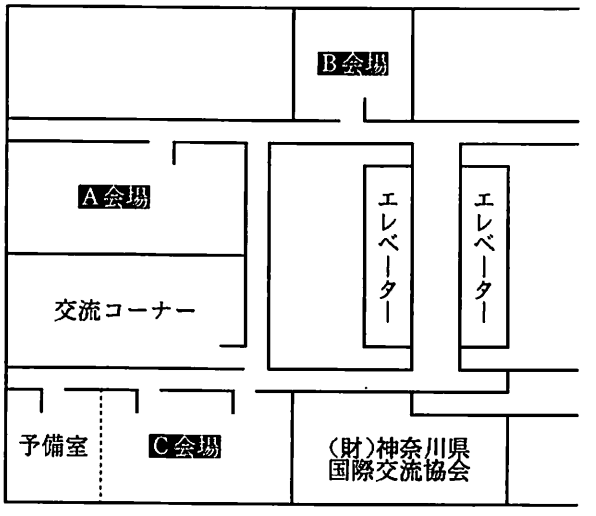
「1995 AIDS 文化フォーラム in 横浜」組織委員会委員長　吉村恭二
実行委員会委員長　広瀬　誠

「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実施要項

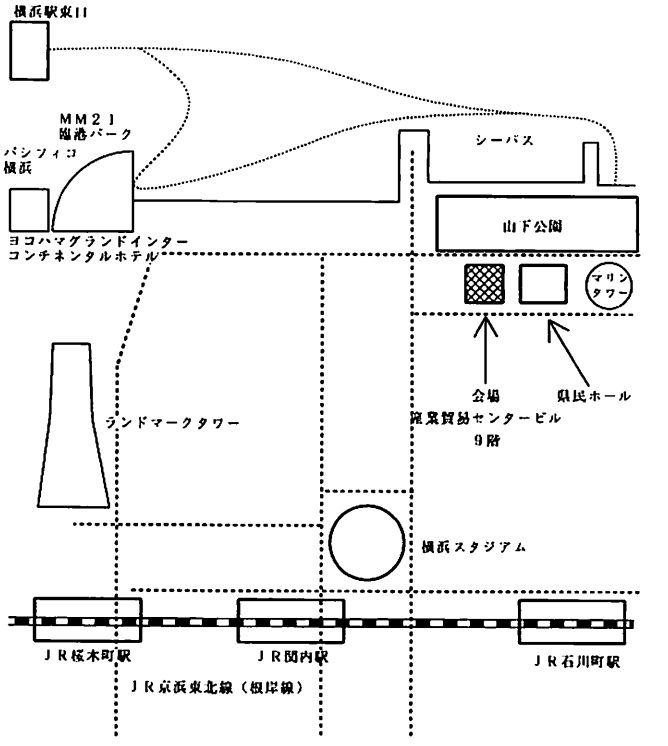
名　　称：「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」
開催期間：1995年８月11日～13日（３日間）
開催場所：㈶神奈川県国際交流協会会議室
テーマ：「ともに生きる」
目　　的：①地域に根ざしたＡＩＤＳサポート
②地域で支える人々への啓発活動
③ＮＧＯのＰ.Ｒ.の場
ジャンル：１．生きる
２．医療とＡＩＤＳ
３．心とＡＩＤＳ
４．ボランティアとＡＩＤＳ
５．社会とＡＩＤＳ
６．セクシュアリティとＡＩＤＳ
７．宗教とＡＩＤＳ
８．文化とＡＩＤＳ
９．教育とＡＩＤＳ
10．薬害とＡＩＤＳ
11．企業とＡＩＤＳ
12．人権とＡＩＤＳ
開催方法：・当日の参加はすべて手弁当、入場無料である。
・発表に必要なものは、参加側で準備する。
・日程・時間帯・場所の調整は、実行委員会で行う。
プログラム構成：①領域をカバーする
②実行委員会の指導するプログラム
③一般募集のプログラム
留意点：①高校生や青年が参加できる工夫
②専門家の為のプログラムより市民が参加できる工夫
③ターゲットを絞ったプログラムの工夫
④学校関係者他の参加
⑤命と心のバランスのある内容
⑥エイズＮＧＯ情報支援
主　　催：「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」組織委員会
共　　催：神奈川県
後　　援：横浜市　川崎市　横須賀市
事務局：〒231 横浜市中区常盤町1-7 横浜YMCA内
ワールド・コミュニケーション・センター／長沢　矢部

ＡＩＤＳ文化フォーラム概要（第1回、1994年）
日　　時：1994年8月6日～14日
場　　所：神奈川県国際交流協会会議室、他
主　　催：ＡＩＤＳ文化フォーラム組織委員会
共　　催：神奈川県
後　　援：横浜市、川崎市、横須賀市
実　　施：ＡＩＤＳ文化フォーラム実行委員会
プログラム：会場内58　会場外4
参加者数：4,305名
ジャンル：ジェネラル、ＰＷＡ、医学、社会問題、若者、同性愛、ボランティア、海外交流、ビジュアル

会場平面図



会場周辺図



同時開催

ＡＩＤＳ関連出版物展、写真展、音楽関係展

横浜エイズ市民・NGO交流ｽｸｴｱｰ　：12日(土)～13日(日)：産業貿易ｾﾝﾀｰ1F展示ﾎｰﾙ、他

周辺行事(1995年8月)

神奈川県／

夏のレッドリボン月間　：1日(月)～16日(水)

世界のエイズポスター・資料展　：1日(月)～15日(火)：県政総合センター

横浜市／

国際エイズ会議ポスター写真展：5日(土)～6日(日)：横浜国立平和会議場ﾏﾘﾝﾛﾋﾞｰ

国際ｴｲｽﾞ会議開催一周年記念ｺﾝｻｰﾄ

「ｽｰﾊﾟｰ・ﾗｲﾌﾞ・ｲﾝ・横浜」ｻｻﾞﾝｵｰﾙｽﾀｰｽﾞ：5日(土)～6日(日)：MM21臨港パーク

第3回ｱｼﾞｱ地域国際ｴｲｽﾞ会議

派遣NGO選考発表会　：5日(土)　：国立横浜国際会議場

横浜エイズミーティング'95　：6日(日)　：産業貿易センター9Fｼﾝﾎﾟｼﾞｱ

AIDSポスター展　：7日(月)～11日(金)：横浜中央地下街(ﾏﾘﾅｰﾄﾞｲﾍﾞﾝﾄ広場)

第14回日本思春期学会　：11日(金)～12日(土)：パシフィコ横浜

第12回世界性科学学会　：12日(日)～16日(水)：パシフィコ横浜

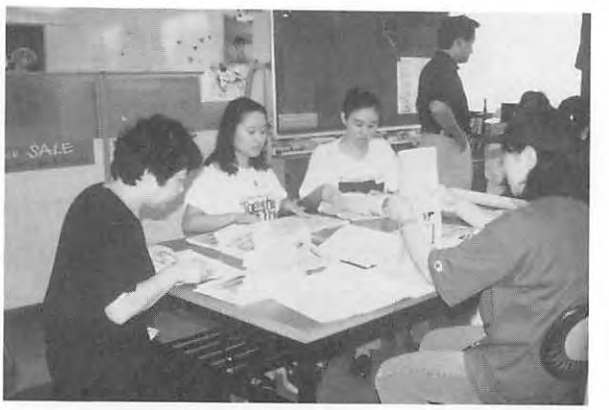
男と女のいい関係　：13日(日)　：パシフィコ横浜

「老人の性問題」札幌医大熊本悦明教授　：14日(月)　：パシフィコ横浜５階小ホール

会場写真

開会式風景。

受付や記録、会場設営…
文化フォーラムを支えたボランティア達。



会場に設けられた事務局内では、
各講師との和やかな交流も生まれた。

会場には薬害原告の手による絵画の展示されていた。

1階ホールで同時開催された関連イベントにて。

近郊のパシフィコ横浜で開催された
第１２回性科学学会での広報の様子。

「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実施報告

1．実施概要

(1)日　時：1995年８月11日～13日
(2)場　所：神奈川県国際交流協会会議室、他
(3)主　催：「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」組織委員会（７名）
(4)共　催：神奈川県
(5)後　援：横浜市、川崎市、横須賀市
(6)実　施：「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」実行委員会（１０名）
(7)参加者数：約2,200名
(8)ボランティア数：約70名

2．組織委員会

大橋雅美（神奈川県生活共同組合連合会）
川本譲次（横浜商工会議所エイズ問題対策懇談会）
唐崎旬代（横浜ＹＷＣＡ）　富安　浩（横浜いのちの電話）
濱尾文郎（カトリック横浜司教区）　平井静子（かながわともしび財団）
吉村恭二（横浜ＹＭＣＡ）

3．実行委員会

岩室紳也（神奈川県秦野保健所）　金澤英樹（横浜市海外交流協会）
久慈美代（横浜ＹＷＣＡ）　小島隆士（横浜いのちの電話）
近内康司（神奈川県国際交流協会）　長沢　勲（横浜ＹＭＣＡ）
西浦うらら　広瀬　誠（横浜ＹＭＣＡ常議員）
細井保路（カトリック横浜司教区）　吉永陽子（医師）

4．ボランティア

田中真帆　興津典明　田中朋実　石原誉一　星原たつこ　原田美紀恵　平野理恵
土屋一歩　実山洋子　沼田雅子　本村弥恵子　和久井玄吾　乙咩裕子　白鳥弘子
桜田千春　今宮恵子　多田あかり　大谷るみ子　橘美智子　小松栄子　迫田陽子
井上三香　清水紀久子　今井友紀子　佐藤寿子　植木泰子　戸田潤子　成田右子
笠原ちとせ　並木麻理子　工藤ゆき　今沢友紀　永井　亮　町田　誠　刑部由加子
上野りえ子　渡辺秀史　中嶋恵子　藤江直樹　樋山　茜　鹿股久美子　小熊恵理子
浜田絹子　宮下克士　柴田　智　立松武久　その他の皆様

5．報告書作成委員会

岩室紳也　岡島龍彦　長沢勲　西浦うらら　藤江直樹　矢部尚美

6．その他

(1)資金援助：カトリック山手教会
カトリック横浜司教区福祉委員会
東京法規出版
横浜商工会議所エイズストップ支援金
(2)会場提供：神奈川県国際交流協会
(3)備品提供：横浜市海外交流協会
(4)物品提供：（株）ユニマットコーポレーション（飲料）
ＵＣＣ上島珈琲（株）（コーヒー及びコーヒーメーカー）
キリンビバレッジ（株）（飲料）
小岩井乳業（株）（飲料）
玉川重徳氏（ＡＩＤＳ関連書籍）

実施報告プログラム

プログラム総括表

「1995ＡＩＤＳ文化フォーラムin横浜」～ともに生きる～のプログラム総括表をここに示します。日程順にプログラムナンバーを付け、タイトル、主催者名とページ数を記載してあります。次ページ（P9）からは、各主催者から、１プログラム１ページで報告していただきましたので、そのまま転載いたします。（一部修正し様式をそろえた所もあります。）

☆プログラム☆　　（○ 内の数字が、プログラムNo.です。）

日	時間	A 会場	B 会場	C 会場
1995/8	12:45～13:00			開会式
１１日（金）	13:00～15:00	① 企業とＡＩＤＳ（ライフ・ファウンデーション：馬場萠）P9	②高校生の疑問に答えます－教育現場から（かながわ女性会議）P10	③ 生きる Positive&positive（バトリック & 紳也）P11
	15:30～17:30	④AIDSと性の基礎知識 知っておきたいセクシュアリティのこと（ライフ・エイズ・プロジェクト）P12	⑤ HIV/AIDS '94~95 未来に向けて（横浜ＹＷＣＡ）P13	⑥絵本で話そう ＡＩＤＳ（あのね広場）P14
	18:00～19:30	⑦ ＨＩＶ感染者 不当解雇訴訟（角田英久）P15	⑧トランスジェンダーのための ＡＩＤＳ講座（T-GAP & LAP）P16	⑨ SAY ACADEMY ～夏の陣～「近ごろの若いもんは…」（SAY NETWORK）P17
１２日（土）	10:00～12:00	⑩ 女性とＡＩＤＳ ※入場は女性のみ（吉永陽子）P18	⑪ いやしのエイズワークショップ（CRI-チルドレンズ・リソース・インターナショナル）P19	⑫コンドームあれこれ（コンドームの達人 & SAY NETWORK）P20
	13:00～15:00	⑬電話によるAIDS相談のデモンストレーション －ロールプレイによる－（横浜いのちの電話）P21	⑭ PWA/Hのケア・サポート（HIVと人権・情報センター）P22	⑮ 感染者をどう思いますか? ～感染者とのトーク&トーク～（新井康和、加藤孝）P23
	15:30～17:30	⑯ 母親が語る－薬害エイズと家族（HIV訴訟を支える会）P24（HIVと人権・情報センター）	⑰朗読ワークショップ（H. I. Voice・Act）P25	⑱心とからだを 感じるワーク（あのね広場）P26
	18:00～19:30	⑲ 薬害エイズ －知られざる大量殺戮の構図－（HIV訴訟を支える会）P27	⑳ H. I. Voice 劇場（H. I. Voice・Act）P28	㉑生活者としての ＡＩＤＳ（東京都立駒込病院：磐井静江）P29
１３日（日）	10:00～12:00	㉒キリスト者として ＡＩＤＳを考える（東京YWCA：江尻美穂子）P30	㉓ 男と女の性教育（横浜エイズ 勉強会）P31	㉔ プライマリケア と AIDS（HIVと人権・情報センター）P32
	13:00～15:00	㉕アウトリーチが語る AIDSの啓発活動について（AIDSケア・プロジェクト）P33	㉖ HIV診療と看護のコツ（横浜市民病院：相楽裕子、小谷優子）P34	㉗エイズ・教育・人権（性を語る会：北沢杏子）P35
	15:30～17:30	㉘エイズ時代の愛と性 ※時間=15:15~16:45（日本家族計画協会：北村邦夫）P36	㉙ＡＩＤＳと同性愛（エイズアクション）P37	㉚在宅・地域ケアの一環としてのバディ（ぷれいす東京）P38
	18:00～19:30			閉会式・懇親会

▷展示プログラム　㉛（P39）土橋正之写真展：
エイズを生きる -LOVE of LIFE with AIDS-　8月11日(金)~13日(日)

No. 1	企業とＡＩＤＳ

主　催／　ライフ・ファウンデーション　国際教育サービス部　馬場萠

ねらい

企業の中でのＡＩＤＳ対策をハワイでのケースを中心に紹介する。

参加者数：５０人

ながれ

・企業のなかでのＡＩＤＳ対策は関心が薄い。

・正しい知識の普及だけでは予防にならない。個人が生活においてできない問題点（例えばコンドームを使えない等）を明らかにし、どうしてできないのかを考える必要がある。

・講演形式ではなく、フォーカスグループによる教育の導入が必要。

・企業の役割

①社会的サポート－ＡＩＤＳ団体への寄付・企業の姿勢を示す

②企業内教育－社員教育（パニック防止のため）

③ユニバーサル・プリコーション－血液処理のトレーニング　（ロールプレイ等）

④管理職に対する会社のＡＩＤＳポリシー－企業内の個人情報の秘密厳守・病気への福利厚生

・日本のＡＩＤＳ予防は非感染者のための予防→みんなのＡＩＤＳ予防へ

参加者からの質問

Ｑ．アメリカでの職場における医療秘密の罰則や規定は？

Ａ．ＡＤＡ法案の存在によりＡＩＤＳがハンディキャップの一つとみなされている。

Ｑ．日本では医療秘密の保守義務はどのようにして守れるのか？

Ａ．日本の現状では保守義務を守るのは難しい。守れるよう変えていく努力が必要。

Ｑ．企業の社内教育はどんな方法があるのか？

Ａ．ハウツーものは意味がないので、その場その場での対応を必要とされる。また、日本とアメリカでは、文化が異なるので、日本の文化を基本においた教育が必要。

感　想

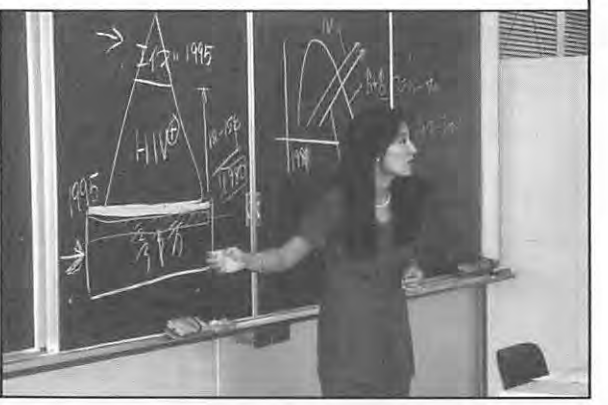
・日本の企業は営利追求だけでは考えられない現状があり、出発点から考え直さなければならないのではと感じた。

・海外のおけるＡＩＤＳに対する関与の様々な方法を知ることができた。

連絡先

International Education Service
LIFE FOUNDATION
233 Keawe St.,#226,
Honolulu, HI 96813
TEL (808)521-2437　FAX (808)521-1552

＊代表電話は英語のみですが、その他は日本語も可能



Ｎｏ．２	高校生の疑問に答えます。－教育現場から－

主　催／　かながわ女性会議　大高ゆみ子　　**ゲスト／**　生田典子・小泉明美
協　力／　池田康介・池田奈緒子（兄妹）

ねらい　高校生における、日・米のＨＩＶ教育の現状の違いや、高校生の意識のズレなどを知る。　　参加者数：５３人

ながれ　①主催者趣旨説明

《ゲスト紹介》　Ⅰ：生田典子→米国（バージニア州）で公立高校日本語教師。
Ⅱ：小泉明美→県立高校養護教諭。Ⅲ：池田康介→ニューヨークの私立高校生。
Ⅳ：池田奈緒子→横浜のインターナショナルスクール在学、中学３年生。

②ゲストトーク　教職にたつ側から（体験を通したＨＩＶ教育の在り方）

ゲスト（アメリカ側）が体験したアメリカの高校でのＡＩＤＳ教育を具体的な例をあげて話す。アメリカの場合では、生徒たちがＨＩＶを持っているという前提にたって具体的な予防指導を下記のようにし、それとともなって人権指導がなされている。

Ⅰ：血液には無防備に触れてはいけない。
Ⅱ：ＳＡＦＥ　ＳＥＸのためにコンドームを使用する。

若者の死因のトップがＡＩＤＳであるアメリカでは、あくまでも具体的である。一方、日本の指導を知るゲストの話では、たいてい日本の場合は、たくさんの資料と数字で発表され、また文部省推薦といわれる「ＡＩＤＳをどう指導するか」というビデオを紹介し、その一部を上映した。

③文部省推奨の「ＡＩＤＳをどう指導するか」一部ビデオ上映

④参加者フリートーク：　参加者は、各々の説明の仕方の違いにも、日米の文化的、社会的違いを感じたとの声が上がった。ゲストからの話による「具体的なアメリカ」に対して日本の場合は指導の仕方も非常にソフトで直接的ではない。むしろ、抽象的でさえあった。例えば、文部省推奨のビデオに登場する男性教員の指導も「接吻じゃうつらないよ」と説明するところでは、「接吻」という言葉に会場からも笑いが起こった。

⑤現在アメリカの私立高校へ通う日本人協力者より

「アメリカの先生は四角い説明をしない。」と発言。日本側のＡＩＤＳに対する教育の在り方を実際見て聞いた上で、断然アメリカ側に軍配を上げた。

⑥主催者からの感想

自己責任の在り方をよく問われるが、それ以前に社会からの情報を正しく、多く得るかが問題となる。本来、一番聞いて欲しい対象者「高校生」が少なかった事が残念である。しかしまた、逆に養護教諭・保健婦の参加が多かった。

連絡先

かながわ女性会議
〒251 神奈川県藤沢市江の島1-11-1
県立かながわ女性センター内
TEL 0466-27-2111　FAX 0466-27-4089

大高ゆみ子
〒236 神奈川県横浜市金沢区並木
2-6-11-302　TEL 045-786-8586

Ｎｏ．３	生きる　－Positive & positive－

主　催／　パトリック、岩室紳也

ねらい

ＨＩＶが体の中にいる「ＨＩＶ　ｐｏｓｉｔｉｖｅ」のパトリックは、人生を前向き、「ｐｏｓｉｔｉｖｅ」に生きている。ＨＩＶと共に生きることについて、友人であり、主治医でもある岩室と語った。　　参加者数：１０２人

ながれ

①自己紹介　（１０分）

・ピアスの数が１４個のパト。派手にすることで人と話すチャンスを増やす。

②ＡＩＤＳとＨＩＶの違い

・パトはＨＩＶをもっているがまだＡＩＤＳではない。発症を遅らせる薬を飲んでいる。

③フリートーキング

・パトのキーワードは「これでいいではなく、これがいい」と自ら選択すること。

・ＡＩＤＳと風邪では、うつす側とうつされる側が変わる。

・パトはどうして感染したの→ＨＩＶ　ｐｏｓｉｔｉｖｅのパートナーとのセックスで感染した。ＨＩＶ／ＡＩＤＳに関する知識はあったのでコンドームを使ったいたけど１回だけ破れ、その時感染した。どんな名人でもコンドームは１００％安全ではない。

・検査でｐｏｓｉｔｉｖｅと言われたときは→大変落ち込んだ。１年くらいかけて前向き（ｐｏｓｉｔｉｖｅ）になっていった。立ち上がることが大切。

・友達には話したの→一人一人に時間をかけて話した。ＨＩＶ　ｐｏｓｉｔｉｖｅだからといって離れる友人はなくかえって友達が増えた。ＨＩＶのことではなく、自分の性格と合わないといって離れた人はいた（笑い）。

・カミングアウトすることでつらいことは→人に話すことでストレスを解消したり、つらいことを忘れられる。講演会はお金や聞きに来ている人のためではなく、自分の為に。

・ＨＩＶに感染したことは自分の人生にとってどんな意味が→一番よかったこと。「一期一会」を大切にできるようになった。

・死ぬことは怖くないのか→皆だれでもいつか死ぬので今死んでも悔いはない。自分にとってすてきな人生だった。

・（フロアから）死ぬことより死に方を考えると怖い→死ぬときはあまり他人に迷惑をかけたくないので植物人間にならないで安楽死をしたい。

感　想

・会場のみんなが真剣に考えていた。ポジティブな人生に感動した。会場が狭かった。

連絡先

Patrick

（クラブＤ．Ｊ．、サウンドプロデューサー）

カミングアウト大作戦［週刊ＳＰＡ］、

パトスタイルのＨＩＶ/ＡＩＤＳの意識を高める活動を展開中

TEL & FAX 03 3422 5246（連絡先：田中）

岩室紳也：コンドームあれこれの頁参照

No. 4	AIDSと性の基礎知識 ～知っておきたいセクシャリティのこと～

主　催／清水茂徳　ライフ・エイズ・プロジェクト（LAP）
たかなしなおみ　トランスジェンダー・エイズ・プロジェクト（T-GAP）

ねらい　AIDSに関わる上で大切なセーフセックス（特にPHA［People with HIV/AIDS：HIV感染者・AIDS患者］とnon-PHAのセックス）や最新のセクシャリティ学を知ることによりAIDSをポジティヴに捉え直し、参加者自身の生と性をより豊かなものにしていく。参加者：８１人

ながれ　**■主催者の趣旨説明**［5分］

■セーフセックス　清水茂徳（LAP）［60分］

A. 3つの揺り返し　1.PWAに有利に
2.Living with PHAではなくLiving with HIV/AIDS
3.笑っちゃえるノリを大切にしよう

B. リスクスケール・カードの並べ替え
12種類の性行為の描かれたカードを感染のリスク別に並べ替える実習。

C. HIV感染に必要な3条件
1.HIVがあること
2.感染に足る充分な量のHIVが体液に含まれていること
3.HIVが体内を流れる血管内に入ること

D. ホント?!「売春婦や不特定多数の人とのセックスは危険な行為である」（by神奈川県発行のパンフレット）　すでに否定された「ハイリスクグループ論」の復活を感染確率のシュミレーションで検証し、その不合理性と差別性を払拭した「ハイリスクビヘイビア論」を再認識する。

■セクシャリティ　たかなしなおみ（T-GAP）［60分］

A. 5つのやくそく　1.プライバシー　2.自分を基準にしない　3.いい悪いの判断しない
4.自分を守らない　5.質問

B. 用語解説　トランスジェンダー(TG)：染色体の性にこだわらずに生活している人
トランスセクシャル(TS)：外科手術で体をこころの性に一致させようとする人。または、すでにそれをした人。
トランスベスタイト(TV)：TGの傾向があり、異性装にとどめている人

C. 3つの軸でセクシャリティを立体化　あなたの現在のセクシャリティはどこ？
Xの軸：sex　生物学的な性（からだ）
Yの軸：gender　心理・行動面の性（こころ、おこない）
Zの軸：sexuality　性的志向性（恋のお相手）

D. へんたい計画　一人一人かけがえのない変態（Queer）である

感　想・リスクスケールの並べ替えで近くの人と話が盛り上がった。
・みんな変態なら楽しいなぁと思いました。

連絡先　ライフ・エイズ・プロジェクト
〒100-91　東京中央郵便局私書箱490号
TEL03-5685-9644　FAX03-5685-9703
E-mail:gcd00301@niftyserve.or.jp
HOME PAGE:http://www.bekkoame.or.jp/~lap/
トランスジェンダー・エイズ・プロジェクト
〒225　横浜市青葉郵便局私書箱24号
TEL030-9066-905
E-mail:vfe06115@niftyserve.or.jp

■リスクスケール・カードの並べ替え実習より。「コンドームあり膣内射精」のカード。

No．5	ＨＩＶ／ＡＩＤＳ’９４～９５　未来に向けて

主　催／　横浜ＹＷＣＡ
京都ＹＷＣＡ　若者・女性とＨＩＶ／ＡＩＤＳ　ＰＲＯＪＥＣＴ（ＰＡＮ）

ねらい　全国２５都市会員による活動を主体とした団体ＹＷＣＡ（キリスト教女子青年会）の中でＨＩＶ／ＡＩＤＳに関する活動を京都ＹＷＣＡを中心として全国的に働きかけている。その名は「若者・女性とＨＩＶ／ＡＩＤＳ　ＰＲＯＪＥＣＴ（ＰＡＮ）」。ＨＩＶ／ＡＩＤＳに対する現状を多くの方に認識してもらう１つの方法として、日々の活動状況をビデオを通じて報告した。　参加者数：４８人

ながれ　①主催者の趣旨説明　（１０分）

②ＰＡＮの活動とは：　９４年横浜で行われた第１０回国際エイズ会議サテライトシンポジュームの内容をＰＡＮの活動の一端としてビデオ上映。ビデオ内容を簡単に紹介。～アジアで起こっている買売春の状況を世界各国から参加する人達に知ってもらい、その中で性産業に従事している人達が自分を守るためにどの様な方法を取っているのか、また、国際的にどの様な連帯がアジアを中心に出来るのか話しあった。アジアの特徴である強制売春の存在、旅行者が子供を買うことで起こる子供の間のＡＩＤＳ問題、国際間の人身売買問題などを提示し、ＨＩＶ感染にさらされた人達に対してのＡＩＤＳ教育の在り方とサポート体制の国際連帯を考えた。

※「サンフォールチルドレン」：フィリピンのスモーキーマウンテン地区に教育も保護も受けれず生活をする「ストリートチルドレン」が大勢いる。彼らに人間として最低限の教育・保護を受けれるようサポートをしている団体。現在、子供たちが書いた絵を元にカードをつくり、販売。生活基盤の一端となるよう働き口を設立。

③なぜ、女性か？：ＹＷＣＡのＷは女性であり、女性の立場で平和・人権問題に取り組んできた。性産業では「女性」を商売道具として扱われる。日本に数多くのアジアの女性が性のはけ口として強制売買に携わり、体に心に大きな傷を受けている。また、自分の身を守れない状況の中に。ＰＡＮでは日常的にＨＩＶ／ＡＩＤＳに関する電話相談や若者を中心に勉強会・アウトリーチ等を行っている。また、ワークショップや講演会等も行う。アジアの女性の買売春問題やストリートチルドレンの現状を踏まえて、京都ＹＷＣＡ　ＡＰＴと共にアジアのＮＧＯや国内の団体とネットワークをもって活動している。

感　想　日常活動の大切さに加えて行政・ＮＧＯの連携がうまく取れていないのが現状である。ＹＷＣＡでＰＲＯＪＥＣＴをもっているのは京都のみ。今後も地味ではあるが活動を展開する。１人１人がＨＩＶ／ＡＩＤＳを考える上で環境・教育・倫理などすべてが関わっている事を認識し、正しい情報・知識を得るような社会にしなけれはならない。

連絡先　**横浜ＹＷＣＡ**
〒231 横浜市中区山下町225番地
TEL 045-681-2903　FAX 045-662-0926
京都ＹＷＣＡ
〒602 京都市上京区室町通出水上ル
TEL 075-431-0351　FAX 075-431-0352
（ＰＡＮ）電話相談
TEL 075-414-3747　FAX 075-411-1348

Ｎｏ．６	絵本で話そうＡＩＤＳ

主　催／ あのね広場　　**講　師／** 森孝子、平野理恵　　**司　会／** 西浦うらら

ねらい

ＡＩＤＳについての様々な事柄を、布の立体絵本を通し表現していこうという試み。

全体の進行はレクチャー形式を避け、話し手と聞き手である参加者の相互コミュニケーションに重点を置き進められた。そのため床に敷いた布の上に全員が車座になるという方法をとった。参加者は女性が多く、保健婦や助産婦、教師、親子での参加も見られた。

参加者数：３２人

ながれ

・作ることは学ぶこと、話すことは気づくことへとつながった。

・人の言葉に頼るより、不器用な表現でも自分の想いと言葉で話そう。

はじめに「なぜ布の絵本が始まった？」（約５分）

絵本による「免疫のお話」（約３０分）

参加者の自己紹介や感想を含んだディスカッション（約１時間２０分）

おわりに、講師より「絵本を通じ感じ学んだこと」（約５分）

二人の講師の話のやりとりで、キャラクター化された細胞やウイルスにより、からだを守る免疫のしくみが展開される。身近な例としてカゼを取り上げ免疫の説明をした後、ＨＩＶとの相違点につなげる。ＨＩＶに感染した人は、異物への抵抗力が落ちていく。病気を運ぶのは感染者ではない、私たちが彼らへ病気を運んでしまうかもしれないという点が強調された。

感　想

・性教育に限らず、人と違うことが悪いことというような教育への疑問や、性教育（保健の授業）に対しての認識の軽さ、教師側の知識不足という言い訳への疑問などが参加者から聞かれた。男性の姿が少ない。

・考えれば考えるだけいろんな疑問を感じる。なんでみんなちゃんと見ようとしないんだろう。私も本当のことに目を向けたばかりだけど…。でも今日一緒に参加した人は、みんなちゃんと考えていて、すっごくいい社会が作れるような気がしました。いろいろな多くの声が、どの意見も答や解決の出るものではなく、特に無理に答える人もいなく、みんなが感じていたことや思ったことを言っていたと思う。（ボランティアの感想より）

連絡先　　あのね広場

個を結ぶゆるやかなネットワークとして形成。資金、労力面など無理をせず、日常の中でできることや必要とされていることを少しづつ始めていこうという集いである。不定期だが通信も発行。

横浜市中区伊勢佐木町2-66　ｲｾｻﾞｷﾏﾘﾔﾋﾞﾙ8F

横浜ＡＩＤＳ市民活動センター内　西浦

TEL 045-262-8881　FAX 045-262-8882

絵本製作作業も同施設内にて毎月第2・4土曜日14:00 ～17:00 に行なわれている。

Ｎｏ．７	ＨＩＶ感染者不当解雇訴訟

主　催／　ＨＩＶ不当解雇訴訟支援団

ゲスト／　徳住堅治、土橋正之、ＨＩＶ不当解雇訴訟原告

ねらい

「Living with AIDS」という言葉は知られてきた。しかし、一人ひとりの心の問題として片付けられ、制度としての「共生」は未だ実現していない。ほとんど知られていない係争中の事例である「HIV感染者不当解雇訴訟」を通じて、「制度としての共生」を考えた。

参加者数：３５人

ながれ

①主催者の趣旨説明（５分）

②事件の概要（１０分）

日本のＡ社に採用された原告は、非移民ビザを取得して海外のＢ社に派遣された。派遣後、就労ビザへの切り替えのための健康診断で、ビザ取得に必要のないＨＩＶ抗体検査を無断でされてしまう。無断で検査を行なった病院は、抗体陽性の結果を、本人ではなくＢ社に通報。Ｂ社社長Ｃは、検査結果をＡ社社長に通報し、帰国させるよう依頼。Ａ社社長は、ＦＡＸにて原告に帰国命令を出し、理由も知らされないまま帰国した原告に電話で「君はエイズだ」と告知。そして「諸般の事情」を理由とした解雇に至った。

③無断検査について（５分）

会社の健康診断制度において、無断でＨＩＶ抗体検査が行なわれる余地は多分にある。

④判決文解説（１０分）

・ＨＩＶ陽性を理由とした解雇は無効かつ違法

・ＨＩＶ陽性のような秘匿性の高い医療情報（プライバシー）を第三者に伝えるのは違法

・生死にかかわる情報を配慮なく告知するのは違法

⑤質疑応答（１０分）

解雇と業績との関連性、およびアメリカ人障害者保護法についての質問が出た。

⑥判決の及ぼす影響（１５分）

明文規定がないため、障害やＢ型肝炎が発覚した場合の解雇は日常茶飯事。この判例がリーディングケースとなる。会社の健康配慮義務に歯止めをかけ健康保持義務の確立。

⑦労働者に対する不当差別に関する論議（３５分）

感　想

・自分の健康情報は自分で管理したい。

・この企業を一例として、日本の社会が未だエイズへの対応が不十分であることを知る。

・制度問題を扱ったのは、このセッションのみで、興味深かった。

連絡先　ＨＩＶ不当解雇訴訟支援団

〒231 横浜市中区伊勢佐木町2-66
伊勢佐木満利屋ビル8F
横浜ＡＩＤＳ市民活動センター内

ＨＩＶ感染者不当解雇訴訟弁護団

〒100 千代田区有楽町1-6-8 松井ビル
旬報法律事務所

カンパのお願い

郵便振替口座　00250-8-59898

「不当解雇訴訟支援団」

Ｎｏ．８	トランスジェンダーのためのエイズ講座

主　催／　トランスジェンダー・エイズ・プロジェクト（Ｔ－ＧＡＰ）
協　力／　ライフ・エイズ・プロジェクト（ＬＡＰ）

ねらい　エイズとセクシュアリティは、エイズがＳＴＤであることを考えれば切ってもきれない関係にある。その意味では、あらゆるタイプの性のありかたにもっと焦点が当てられるべきである。この問題意識にたち、本講座においてＴ－ＧＡＰでは、トランスジェンダー（ＴＧ）という性のありかた、そしてそのエイズとの関係を明らかにして啓発することを試みた。なお当日はＴＧ当事者の参加が多数あれば、ＴＧむけのエイズ予防講座を行う予定であったが、当事者の参加がなかったため、今回は見送られた。

参加者数：３４人

ながれ　①はじめに（１０分）　講師の自己紹介とＴ－ＧＡＰという団体の紹介。本講座に先立って行われた「ＡＩＤＳと性の基礎知識」（ＬＡＰ主催／Ｔ－ＧＡＰ後援）との関連性を概説した。

②トランスジェンダーの基礎知識（３５分）　＞まず言葉の意味から：一般によく聞かれるニューハーフ、Ｍｒ．レディという言葉はマスコミがつくった俗語であり、単に職業の名称であることを説明。その上でＴＧ／ＴＳ／ＴＶ（それぞれトランスジェンダー、トランスセクシュアル、トランスヴェスタイト）という概念を説明した。ＴＧとは既成の性を超えた形で、あるいは既成の性にこだわずに生きている人。ＴＳはそのなかでも外科手術によって体をも変えた（変えようとしている）人。最後にＴＶとはそのＴＧ性を主にパートタイムの異性装に留めている人のことを指す。　＞ＴＧが現在抱えている諸問題：その存在が社会的に認知されていないがゆえに、ＴＧは数々の問題を抱え込んでしまっている。たとえば、それは就職、住居、結婚などの社会的側面、自己のアイデンティティ・クライシスなどの精神的側面である。この社会が男／女のふたつの性を前提としている限り、つねにＴＧには日常生活レベルでの問題が生じてしまう。中間の性という存在を社会が認知すべき時に来ているのではないだろうか？

③ＴＧとエイズ（１５分）　ＴＧもアンセイフ・セックスをすれば、とうぜんＨＩＶに感染する。その意味でＨＩＶに例外などない。ところがトランスジェンダーのなかには「自分とは関係のない病気」という意見が時々聞かれる。これは性的志向性によるエイズの活動ともに「存在の性」という視点からみた活動の必要性を示唆する。またＨＩＶ抗体検査時に、暗証番号などとともに「男」か「女」かを尋ねることは、自分の性別をことさらに表明したくない一部のトランスジェンダーたちを検査から遠ざけてしまう結果になることを指摘した。

④まとめ：トランスジェンダーという日との存在を前提としたエイズ対策、性教育が必要

感　想　○トランスジェンダーは人間の性をめぐるファジーな存在のため、基本的な概念でも説明がわかりづらくなる傾向にある。
○性的志向性とは、異なるフェイズの問題であることが明らかに。
○当日参加がほとんどなかったＴＧ当事者たちにフォーカスした広報活動の充実が課題。

連絡先

Ｔ－ＧＡＰ（トランスジェンダー・エイズ・プロジェクト）
〒225　横浜青葉郵便局私書箱24号　移動電話　030-9066-905　担当：たかなし

Ｎｏ．９	SAY ACADEMY ～夏の陣～「近ごろの若いもんは・・・」

主　催／ SAY NETWORK　　**協　力／** 岩室紳也

ねらい

「若者による若者のためのAIDS予防キャンペーン」SAY NETWORKが、若者の性に対する意識やその問題点を提示し、コンドームを使ったSTD、望まない妊娠、HIVの予防を参加者（年齢、性別に関係なく）に伝える。　　参加者数：７５人

ながれ

文化フォーラム参加者（１０代～４０代）とSAYメンバーが５グループに分かれ、グループ毎に３つのテーマに対する解答・ディスカッションを実施。各テーマの最後にコメンテーターによるワンポイントレッスンで詳しく解説した。

テーマ１　１９９５横浜市成人式会場における新成人200人アンケートからの出題。「本日の成人式参加者35,000人の中でSEX経験のある人は何％（４０％、６０％、８０％）いるでしょうか」の質問に対して最も多かった数字は？

・ポイント：「２０才で経験がある人が８０％いると思う」が最も多かった。間接的な聞き方をしているので、数字に信憑性がある。

テーマ２　アダルトビデオを上映し、このようなSEXをしたときの問題点を各グループで発表。

・ポイント：ほとんどのAVで見られるコンドームなしのSEXは、望まない妊娠、STD、HIV感染の可能性がある→AVのようなSEXをマニュアルとし、実際にする若者がいる。間違った性情報を若者が吸収してしまっている。

テーマ３　男女カップルのショートコント３パターンを見てのディスカッション

①コンドーム無しのSEXにNoと言えない女性　　→嫌われるのが恐い、受け身が多い

②コンドーム無しのSEXにNoと言える女性　　→自分を大事にする＝相手を大事にする

③コンドームが無しでもSEXをしようとする男女→男性も受け身的な人も多い。女性もSEXに対する本能がある。

・ポイント：現在、HIVの主な感染経路はSEXである。正しいコンドームの使用は、HIV、STD、望まない妊娠の有効な予防方法である。恋人同士、友達、身近な人達とHIV/AIDSについて、性について、いろいろ話す場をつくっていくことが大事である。

感　想

性教育の大切さを実感した。SAYの活動に好感が持てた。まとまりがなかった。噂にはきいていたAV、すごかった。でも、やっぱり作りものだと思えた。でも、SEXをこんなものととらえる中高生、恐い。留意点として内容にあった年齢制限をするべき。

連絡先

SAY NETWORK

〒232 横浜市南区新川町5-32-207

TEL 045-251-8944　FAX 045-261-7999

活動：毎週月曜１８：３０より定例ミーティングを事務局にて実施

岩室紳也

コンドームあれこれの頁参照

No. 10	女性とエイズ

主　催／　吉永　陽子

ねらい　全世界のＨＩＶ感染者の４０％は女性であり、そのほとんどは異性間性交渉による感染である。しかし、自分には関係がない，ＳＴＤとしてのＡＩＤＳは、自業自得と考える人が存在し、ＡＩＤＳ教育の現場では男性の意識改革が必要という声も聞かれる。ここでは、女性とＡＩＤＳについてその基本的知識の修得のみならず、グループワーク，ボディイワークを体験する。ＨＩＶと共に生きる事を考え、女性自身の「性」への「気づき」と「傷み」への共感，連帯，そこからはじまる「癒し」と「再生」を目的とした。

参加者数：９１人（主催者の意図により参加は女性のみ）

ながれ　①オリエンテーション（１０分）：主催者から参加者への一方的な講義形式のセッションではなく、参加者が主体をもつワークショップ形式で行う事。

②グループワーク１（２０分）：グループ分けとグループメンバーの自己紹介及びグランドルールの決定。主催者側から、ＰＷＡ／Ｈが参加していると想定する，ＡＩＤＳを自分自身の問題としてとらえる，秘密を守る，活発な意見交換を行う等の提案がなされそれに追加するという課題で最初の話し合いがもたれた。これ以降は中途参加不可とする。

③グループワーク２（３０分）：グループ内で役割分担（司会，発表者等）を決定し、ＡＩＤＳについてどんな病気かを説明してもらう。それについて、「はじめて知ったこと」，「気づいたこと」，「わからないこと」を話しあう。

④フィードバックと短い講義（４０分）：話し合った内容の要約をグループ別に発表してもらう。疑問点については、その答えを各グループ同志のやりとりで解決してもらう。主催者はあくまでファシリテーターに徹し、性行為感染症としてのＡＩＤＳと女性の膣の状態の関係，コンドーム使用方法とその使用における交渉術について，ＡＩＤＳ発病の経過とそのケアについて，女性感染者特有の症状等をコメントした。

⑤グループワーク３（２０分）：女性とＡＩＤＳについて感想を含めフリートキング

⑥ボディイワーク（２０分）：主催者が女性感染者の手記を紹介。ＢＧＭを聞きながら、膣で呼吸するイメージを抱いて瞑想した。心と体から双方のアプローチによって、女性自身が「性的存在」としての自己を認識し、開示し、傷みをわかちあうことで癒されていく過程（ｈｅａｌｉｎｇ＆ｅｍｐｏｗｅｒｍｅｎｔ）を同一の空間で体験した。

感想　・身も心も開放して、女性としての身体の大切さ強さを感じた。女性のための集いは貴重なひとときだった。・性について深く考えさせられた。・ボディイワークは非常に感動的だった。言葉では表せない何かがあった。・自分の膣を意識して生きていく。・若い世代の人達にも聞かせたかった。・早期発見は大切だということを知った。等等

連絡先　　吉永　陽子
医師，医学博士・ＨＩＶと人権情報センター会員，オープンドア(PWA/Hのための宅配給食ボランティアグループ）会員，
携帯TEL 030-556-2934
勤務先：川崎保健所
〒210　川崎市川崎区東田町8
TEL 044-201-3233　FAX 044-246-0961

注）女性のみに参加を限定した理由
ＡＩＤＳの背景には、男性優位社会における女性問題が存在している。それ故男性非難に終始する問題解決型思考の限界をブレイクスルーする必要がある。そのためには、男性によって「刷り込まれた」女性像ではなく、本来の女性自身のアイデンティティの確立が第一歩となるために参加を制限した。

No. 11	いやしのエイズワークショップ

主　催／　ＣＲＩ－チルドレンズ・リソース・インターナショナル

ねらい

性とエイズを自分に引き寄せて考えてみることで、自分の中にある性とエイズに対するわだかまりを減らし、エイズへの必要以上の恐怖感を軽減する。

参加者数：３８人

ながれ

①あいさつ（リラックスとふれあい）

日本式のあいさつとブラジル式のあいさつをやってみる。日本式のあいさつでは二人組でおじぎと自己紹介。ブラジル式ではほっぺたにキス（ブラジル式で実際には顔を寄せてチュッと音を立てるだけ）をして自己紹介。

②等身大の裸の絵を描く（多くの人が性に関するわだかまりを持っていることを改めて考えてみるため）

３グループに分かれ、グループごとに等身大の裸の絵を描く。

１つのグループは男の人、もう一つは女の人、もう一つは男と女の両方を描いた。性器を描くところで戸惑う人が多い。性器を描く段になると人にやってもらおうとする人が多くみられた。その後、３つの絵を囲んでディスカッション。裸を描くときにどう感じたか、性器を描くことには抵抗があるのか、あるのならなぜなのか等について話し合う。

③ロールプレイ（実際に感染している人が何を考え、どう思うのか自分の身に引き寄せて疑似体験するため。また現に感染している人の場合は、自分とは違う状況の感染者の気持ちを疑似体験するため）

二人組に別れて「肉体関係のない恋人同士で一方はＨＩＶに感染している。しかしその事を相手に告げられずに悩んでいる。そしてＨＩＶ感染のことを相手に伝えようとする」という設定でロールプレイを行った。ロールプレイ後、３～４グループ合同で「どういう展開になったか」「何を感じたか」を話し合った。その話し合いの後、その要約をグループの代表が全員の前で発表、話し合った。

④主催者側の感想

・準備不足のまま、ブラジルで２０時間以上をかけて行う内容を駆け足でやってしまったため、時間配分などに不都合が生じてしまい申し訳有りませんでした。

感　想

・ロールプレイで実際に感染している人の気持ちを少しだが理解できた気がする。
・実際に感染者の立場になってみると自分は恋人にＨＩＶ感染を告白できなかった。
・参加者が皆、知識のある人だったので優等生的な答えが多かった気がする。
・ロールプレイ後のディスカッションはせっかく盛り上がっていたので時間が足りなくなて残念。前半の絵を描く部分はもっと少なくして後半に時間をとるべきだったのでは？

連絡先

ＣＲＩ－チルドレンズ・リソース・インターナショナル
〒227　神奈川県横浜市青葉区しらとり台57-33-201
TEL & FAX 045-982-5692　　E-Mail crijapan@bekkoame.or .jp

Ｎｏ．12	コンドームあれこれ

主　催／　コンドームの達人 & SAY NETWORK　**ゲスト／**　矢部信也（不二ラテックス㈱）
協　力／　SAY NETWORK（斉藤肇、笠原英知、大久保敦子）

ねらい

「ＡＩＤＳ予防にコンドーム」ということは大分知られてきた。しかし、コンドームのこと、使うときのコミュニケーションの難しさ、本当の正しい使い方を知っている人はどれだけいるだろうか。みんなが知らないコンドームのあれこれについて「コンドームの達人」と、もっとも使って欲しい「若者」とともに語り合った。　**参加者数**　：７６人

ながれ　①主催者の趣旨説明（１０分）

②コンドームの基礎知識編（３０分）**（コンドームを２枚重ねてはいけない？）**

コンドームの歴史（ギリシャ時代はパピルス、１７世紀は魚の浮袋）から入り、クイズ形式で強度（空気なら４０リットル）、伸展度（８倍）、サイズの有無（ＳＭＬがある）、ＪＩＳ規格がある、２枚重ねは破れやすい、はずれることがある、射精直前に装着したのでは避妊にならない、使用期限がある、出荷時には全数を検査している、国内生産量(８億個、１４．４個／男性１人)、等に答えた。フロアから価格の違い(加工の多さ)、ＰＬ法(取り扱い説明書を同一に)、価格は下がらないか(?)、等の質問がでた。

③コンドーム装着の実用編（５０分）

（コンドームは銘柄指定で使おう、女性から着けてと言おう）

・着けるタイミングが難しい　**→「立ったら着けよう、コンドーム」(達人)**
・「コンドームをつけて」と言うと「遊んでいるのでは・」と思われ、女性がコンドームを持ち歩くことにためらいがある。**→大ゲンカするくらい話し合って欲しい(大久保)**
・どんなコンドームがいいのか　**→自分にあったのを銘柄指定で買おう(笠原)**
・「愛のあるＳＥＸ」をしている人ばかりではない。ＡＩＤＳの人への差別を考えると答えは出せない。

④コンドーム装着コンテスト（３０分）**（コンドームの持ち歩き方で思いやりが分かる）**

買ったコンドームをどこにしまうか（財布×、ハードケース○）、爪（短い○、伸びている×）、・・・減点方式で残った男女４人ずつに、「包茎の模型」にコンドームを装着してもらい優勝者を決定した。

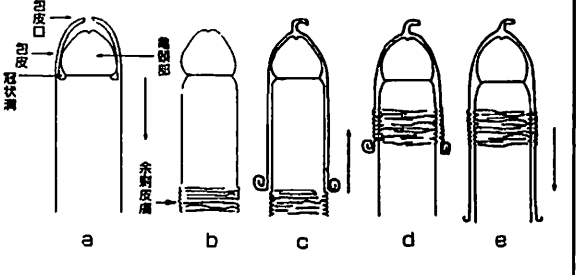
⑤まとめ：コンドームを正しく使うにはテクニックとコミュニケーションの両方が必要

感想　・「愛のないＳＥＸ」もあるということを考えなくては・・・・。
・簡単にできそうなコンドームの装着もとっても難しい。
・他力(男)本願ではなく、女も主体的にとりくまなければいけないと思った。

連絡先

コンドームの達人（岩室紳也）：医師
神奈川県立厚木病院泌尿器科
神奈川県秦野保健所
〒257 秦野市曽屋2-9-9 秦野保健所
TEL 0463-82-1428　FAX 0463-83-5872
不二ラテックス㈱
SAY NETWORK：（SAY ACADEMYの頁参照）

コンドームの正しい装着法



No. 13	電話によるＡＩＤＳ相談のデモンストレーション　ーロールプレイによるー

主　催／　横浜いのちの電話　　講　師／　有田モト子

ねらい

・電話によるＡＩＤＳ相談の実際を体験してもらい、電話相談の大切さと同時に困難さも実感してもらう。　　参加者数：６５名

ながれ

①講師の指導により、グループに別れ、自己紹介、参加の動機等を語り合う。（１０分）
電話による相談についての説明。（２０分）

②参加の動機

・どうしても他人事のような感じなのでもっと現実を知りたい。
・漠然とした知識しか持っていないので。
・クライエントの抗体検査前後の心理をどう受け止めたらよいかを勉強したくて。
・学校教育に対して不安があるので、親としてどう関わればいいのか。

③事例に基づくロールプレイ（２例２０分）

・相談員が掛け手になり、受け手を会場から募り、事例をもとにロールプレイを行う。

④その後の話合い（７０分）

・相談者の悩みを受け止める。
・説得、説教にならないようにする。
・相談者の状況と悩みを感じているそのままを聴く。
・相談者の話の流れを邪魔しないように受容的に聴く。
・偏見や受け手の価値観を押し付けない。
・不安は１回の相談では解消しない。継続して関われるようにすることが大切。
・罪の意識からの解放
（自分の過去の行動に対する罪悪感を減少させ、気持ちを解す。）
・相談者の悲観的な言葉「～しか」という表現が多い。「～もある」「～もできる」そういう可能性への発想の転換を促すことも大切。但しそれが前面に出すぎてしまっては、相談者の気持ちをそいでしまうことがあるので注意を要する。
・相談者より一度しかかかってこない電話かも知れない。最低限伝えたいことは何ですか
ＨＩＶ感染が不明な方へ……一人で悩まないで検査を受けてほしい。
ＨＩＶ抗体検査の結果が陽性の方へ……援助を受けられるボランティア団体、相談窓口、医療機関等の情報を伝える。
・ＡＩＤＳだからと特別な病気として扱わない。

感　想（参加者の）

・電話相談については、相手の顔が見えないだけに受け答え、雰囲気が大切。
・共感的理解の大切さを知った。
・電話での相談を受ける場合の難しさを知った。

連絡先	横浜いのちの電話エイズ相談
横浜いのちの電話 〒240 横浜市保土ヶ谷郵便局私書箱３２号	一人で悩まず電話を ０４５ （３３５）７８３０

No. 14	PWH／Aのケア・サポート

主　催／　ＨＩＶと人権・情報センター

パネリスト／　五島真理為（全国事務局事務局長）、太田裕治（ケア・サポート部会）

参加者数：５６人

ねらい

ＰＷＨ／Ａの現状は表面化しにくく、それゆえに人々の必要性に応じた対策や支援が行われているとは言い難い状況である。直接支援を行う団体としてその現状を知らせ、共生の社会への足掛かりとなれることをねらいとした。

ながれ

①主催グループの活動紹介とその理念（約６０分）

１９８８年大阪で設立した同グループは、現在大阪のほか東京、松山、名古屋、横浜、北陸、兵庫に支部を置いている。活動内容は電話相談、家族も含めたＰＷＨ／Ａへの直接支援、またＰＷＨ／Ａ自身による自助活動を中心に行っている。

・ＰＷＨ／ＡのＱＯＬ(Quality of Life) を重要視する。
・共生とはひとりひとりを「人」として尊重し認めていくことである。
・それぞれの人々が交流し、ネットワークを作っていくことが大切である。
・今後は「死の受容」に焦点を置いた活動も加えていきたい。

前半の内容は上記に重点を置き、国内のＰＷＨ／Ａの現状や、英国、ブラジルでのサポート団体の活動紹介を折り交ぜて進行された。

②ケア・サポート活動について（約５０分）

・実際のサポート活動：薬害裁判の傍聴／医療機関への送り迎えや診察の際の付添い（医師との交渉）／日常生活の援助／関係機関との交渉／疾病予防の為の情報提供（病気は防ぐほうが簡単）
・サポートメンバーの育成：段階的に活動へ参加していく中で育成（希望者がすぐに加われるわけではない）／本人の資質に合わせた育成／チームによるサポートが原則
・サポート活動での課題：サポートメンバーの肉体的、精神的健康維持／ＰＷＡ／Ｈの家族との良い関係形成

③質疑応答（約１０分）

感　想

参加者からは、ケア・サポート活動の規定（ボーダーライン等）についての質問や、トレーニングに関する質問がでた。またＰＷＨ／Ａの現状を知ったことで、それらのことを常に念頭に置いて動いていきたいといった意見も聞かれた。

連絡先

ＨＩＶと人権・情報センター
東京事務局
〒101 東京都千代田区神田司町2-17-4
風間ビル2F
TEL & FAX 03-5259-0622
全国事務局　TEL 03-5256-3534
TEL 0720-43-2041

活動概要

・ＰＷＨ／Ａによる自助グループ及びリビングセンターの運営
・ケア・サポート
・医療機関の開拓
・相談電話の常設
・知識の普及活動
・国会、行政への要請
・機関誌の発行
・学会への参加、発表

Ｎｏ．15	感染者をどう思いますか？～感染者とのトーク＆トーク～

主　催／　新井康和、加藤孝

ねらい

同性愛者への偏見とＡＩＤＳに対する偏見の深い結びつきを知る。

参加者数：１４２人

ながれ

①二人の紹介

新井康和－感染者　　加藤孝－新井氏のパートナー

②ＨＩＶに感染して

・７年前に足の調子が悪くなったため病院に行き、２週間後に感染を告知された。その時は悲しい気持ちにはならなかったが、次の日からの生活の不安はあった。

・告知を受けてからは、水商売だったのでお客さんと信頼関係がなくなるように感じ、仕事を続けていくのが精神的に苦痛だった。

③差別について

・頼れる人がいなかったが、ゲイサークルで何でも話せる仲間ができた。その仲間達は自分のことを全く差別しなかった。→私は悲劇のヒロインではない。

・エイズとゲイに対する差別と偏見を感じている。ゲイは存在しない者とされている。

④生活について

・生活保護を受ける時はとても迷ったが、両親からの支援も受けられなかったので、生活保護を受けるしか方法はなかった。生活保護を受けていることを恥ずかしがらずに生きていきたい。→行政のＨＩＶに関する逆差別により、生活保護は受けやすかった。

・加藤氏とは１年以上一緒に暮らしている。最初は心配なことも多かったが、カミソリ等日常に使う物のみ区別しおり、特別な心配はしていない。

⑤生きること

・ゲイでもレズビアンでも人間は人間、エイズになっても病気は病気ということをわかってほしい。

・命は自分が生きようと思わなければ生きられないということを忘れないでほしい。

感　想

・お二人の熱心な態度に心を打たれた。

・二人が持っているような憤りと私が持っている憤りが似ている。

連絡先

新井康和　加藤孝

〒338 埼玉県与野市大戸1-10-7
桑原荘201号
TEL 048-831-7383

No. 16	母親が語る－薬害エイズと家族－

主　催／　ＨＩＶと人件・情報センター、ＨＩＶ訴訟を支える会

ゲスト／　岩崎和美、川田悦子、五島真理為

ねらい

薬害エイズの被害は、単に感染被害者本人の被害に留まらない。夢半ば１９才で息子さんを殺された大阪訴訟原告の岩崎さん、病をおして闘う１９才の息子を持つ東京訴訟原告の川田さんという、２人の母親のお話から、薬害エイズがもたらした家庭破壊の被害を知ってもらう。　　参加者数：２２３人

ながれ

①主催者の趣旨説明（５分）

②川田悦子さんのお話（３０分）

年代ごとの社会の動きとともに家族の状況を説明し、「あなた達は、只の薬で感染したんじゃないですか！？」と言われた無念などを語った。そして今までの闘いを「泣きながら闘ってきた」「何としても子供の命を守りたいとの思いで闘ってきた」と表現。

③岩崎和美さんのお話（３５分）

血友病を抱えながらも一所懸命生きていたところへ襲った薬害エイズ。最初は泣いてばかりいたが、日々の生活や病との闘いでは、泣いているどころではなかったと語る。一つ一つ夢を奪われ壊されていった悔しさ、そして死。このまま握りつぶされたくないとの思いを語った。

④同じ立場の人との出会いとカミングアウト（１５分）

川田さんは、輸血で感染したジョナサン君との出会いなどを通じて、実名で闘い始めた経緯を語った。岩崎さんは、まだ生きている患者さんたちを救いたいとの思いで実名公表した思いを語る。

⑤ヘモフィリア・ホロコースト（１０分）

「本当に危ないと知らされていれば、使わなかった」「国産のクリオ製剤に切り換えれば安全だった」と、命を大切にしない薬務行政・製薬企業との癒着を告発。

⑥提言（１０分）

・病気を知ることから始めてほしい。なぜ、この被害が出たのか考えてほしい。（岩崎）

・運動・世論の力なしには勝てない。一緒に怒ってほしい。（川田）

感　想

・本人だけでなく家族の痛みが伝わってきた。・自分と関りのない問題ではないと痛切に感じた。・厚生省の非人間的な行為に幻滅し怒りを持った。

連絡先

HIVと人権・情報センター

〒101 千代田区神田多町2-5 若葉亭2F

HIV訴訟を支える会

〒112 文京区大塚5-6-15 Yビル301

保田法律事務所内

TEL 03-5978-4335　FAX 03-5978-4330

Ｎｏ．17	朗読ワークショップ

主　催／ H.I.Voice Act　**講　師／** 芹川藍(劇団青い鳥)　**協　力／** H.I.Voice編集局

ねらい

感染者と未感染者が互いに理解を深めることを目的として発行されている、月刊情報誌「H.I.Voice 」には、ＡＩＤＳに係わる様々な人の声があり、顔があります。悩みや希望の中で生活する家族（親子や夫婦）・仲間の等身大の姿が見えてきます。

『朗読ワークショップ』とは、この「H.I.Voice 」誌を「朗読」の素材として使わせてもらい、声に出して読むことで、そこにある思いを、共感を通して、自分の心と身体に取り入れる作業を行うことです。　参加者数：４６人

ながれ

①始めの言葉（５分）

…朗読ワークショップについての説明。

②講師の話（１０分）

…声に出して読むことの意味「言魂(ことだま)」。（肉声が言葉に魂を吹き込む）

・書いた人の思いをそのままストンと自然に受け入れて欲しい＝魂の震えが伝わる。

◇書き手→読み手→聞き手

③輪読（ストップエイズかながわニュース　Ｎｏ．６／７４項より）（４５分）

…H.I.Voice 誌への投稿文の抜粋を参加者が順番に読む／他の人は聞く。

・４０名以上での輪読はともすれば変化に乏しくなりがちだが、バックの音楽で感情的に落ちつき集中力も持続。

④感想（読んでみて・自分とＨＩＶ）（４５分）

…参加者が一人づつ順番に発表する。

・新たな気付、仲間の存在を知る、実存感等。

感　想　（参加者アンケートの一部）

・このような形態の会、とても良かった。気持ちいい一時、ありがとうございました。（女性・40歳・公務員・小田原市）　・輪になって朗読を聞き、朗読することの楽しさを味わいました。今後とも益々のご活躍を！（女性・57歳・横浜市）　・目で読んでいくだけとは異なり、骨に肉がついていく様な膨らみを感じました。（女性・45歳・会社員・相模原市）　・H.I.Voice は活字で目を通したことがあります。でも、声にして聞いたのは初めてです。よく、ＰＷＡ／Ｈの気持ちで考えるって言いますよね。この朗読を通じて、そんな気持ちが今までとは異なった形で感じとれたような気がします。（女性・20歳・大学生・海老名市）

連絡先　TEL 045-201-1111 内線5057 岡島

H.I.Voice Act ＝「H.I.Voice 誌」を朗読することで、ＡＩＤＳに係わる問題を理解し、共感と支援の輪を広げていこうと、1995年３月に高校生、大学生、会社員、主婦、公務員などで結成された市民グループ。

濱田絹子・宮下克士・迫田陽子・成田右子
樋山茜・小熊恵里子・立松武久・岡島龍彦

No. 18	心とからだを感じるワーク

主　催／　あのね広場

講　師／　稲葉恵他３名　　**司　会／**　西浦うらら

ねらい

心とからだはそれぞれが影響しあい、健康へのバランスを保っている。それに目を向けることは、疾病や傷害を持った際にも自己の中の自然治癒力を高めていくことにつながるのではないか。そんなホリスティック医学的観点から企画した。

自ら治す（ベスト状態へ導く）意識と、医療現場の主となる薬剤を含む科学的治療だけではない方法の一部を提示していきたかった。ＡＩＤＳ発症を可能な限り遅らせる、または発症し現われる感染症を克服していくために、ひとつの参考となればと願った。

参加者数：４５人

ながれ

文章では解り辛い点も多いが実技内容を大雑把に記した。（実際の進行順とは異なる）

①一人で行なえるもの

・日常から切り替え解していく導入（脱力した両手を振り子にからだを回す／仰向けに寝た姿勢で、呼吸を意識する／からだ全体、片側などで伸びをする）

②二人一組で行なうもの

・背骨の運動（弓なりにしなる、反り返る。一人はその補助をする）

・からだを相手に預ける（脱力し目を閉じた状態を、一人が押す、または支える）

・協調（２本の竹を左右１本の指で支える。竹の動きにお互いが動きを合わせる）

・解きほぐす（仰向きに寝た相手の両足を膝の上に乗せ、軽い左右の振り子運動）

③多人数で行なうもの

・エネルギーの流れ（手をつなぎ輪を作る。左右に揺れることで他者との間に流れるエネルギーを感じる）

・自己を開く（輪になり、ひとつのボールをイメージして投げあう）

感　想

・楽しくリラックスすることができたという感想も多かったが、以下の反省点も。

・レクチャーではなく実技講習の上、予想外人数だったこともあり会場が狭すぎた。

・参加者へ充分に目的や意図を伝えられなかったため、何故ＡＩＤＳと結びつくのかという点で不完全燃焼で終わった人、また実技講習と知らず参加し戸惑った人もいた。

連絡先

あのね広場

個を結ぶゆるやかなネットワークとして形成。資金、労力面など無理をせず、日常の中でできることや必要とされていることを少しづつ始めていこうという集いである。不定期だが通信も発行。

今回企画のリラクゼーションに関するワークショップも継続定期化して行なう予定でいる。

〒231
横浜市中区伊勢佐木町2-66
イセザキマリヤビル8F
横浜ＡＩＤＳ市民活動センター内　西浦
TEL 045-262-8881　FAX 045-262-8882

Ｎｏ．19	薬害エイズ―知られざる大量殺戮の構図―

主　催／　ＨＩＶ訴訟を支える会

ゲスト／　渡邉彰悟、杉山真一

ねらい

薬害エイズの責任を追求するＨＩＶ訴訟は、その被害を明らかにすることのみでは勝つことができない。被告である厚生省と製薬企業の加害行為を明らかにし、かつその加害行為によって生じた被害である因果関係を証明することが必要である。加害構造を通じて、これが避けられた被害であることを知ってもらう。

参加者数：８７人

ながれ

①ＮＨＫスペシャル『埋もれたエイズ報告』上映（３５分）

②事実関係の説明（１０分）

アメリカと日本の動きを年代ごとに解説

③過失論（１５分）

被害がある→被告の（故意に近い）過失に基づく行為→被害と過失行為との因果関係

・'７０年代過失論…アメリカの売血を原料としていた、多人数の血を混ぜていた製法

・'８０年代過失論…エイズの危険を知らせる警告に対し何もしなかった

④因果関係論（１０分）

原告の感染が危険を予知できた「過失の基準時」以降であることを立証する必要があるが、原告の感染時期は不明である。そこで、原告の感染が「過失の基準時」以降であるとの推定を主張し、それを否定するならば「過失の基準時」以降の製剤の安全性を立証する責任を被告に求めている。

⑤質疑応答（３０分）

「全面解決とは何か？」「日赤の責任は？」「インフォームド・コンセントの問題」「当時の関係者の個人責任は？」などの質問が出た。

感　想

厚生省の、あまりにも無責任な態度にはあきれるばかりです。感染者１号の発表も、すでに血友病患者で感染が認められていたにもかかわらず、同性愛者を第１号として発表したのは、差別そのもの、責任のがれそのものではないか。

連絡先

ＨＩＶ訴訟を支える会

〒112 文京区大塚5-6-15 Yビル301
保田法律事務所内

TEL 03-5978-4335　FAX 5978-4330

東京ＨＩＶ訴訟弁護団事務局

〒112 文京区大塚3-19-10 文京KSビル2F
鈴木利廣法律事務所内

No. 20	H. I. Voice劇場

主　催／ H.I.Voice Act　**音　響／** 芹川藍(劇団青い鳥)　**協　力／** H.I.Voice編集局

ねらい

ＡＩＤＳ患者やＨＩＶ感染者、その家族や友人のメッセージを声にだして読むことで、その思いを心と体に吸収し、ＡＩＤＳの理解を深めるという実験的な『朗読ワークショップ』を行いました。『H. I. Voice劇場』とは、このワークショップの成果を参加者有志で「朗読劇」として発表することです。観客は、肉声を通して耳から、そこにあるＰＷＡや家族の思いを、身体に取り入れ、また、発表者は発表することで、共感をより確かなものとしていきます。　　参加者数：３６人（発表者１２名／観客２４名）

ながれ

①始めの言葉（５分）

…H. I. Voice劇場についての説明

・私たちにとって、朗読することは、非日常ではなく、この「思い」を日常としている事の重さを知ること、そして、こんな「思い」をもちながら、同じような仲間の存在も知らずに心細い毎日を送っている一人でも多くの人達に、このメッセージが伝わることを願っています。等

②劇場（読み手が役を決めて朗読）（５０分）

…従来からのメンバー８名＋今回のワークショップ参加者の有志４名の計１２名による朗読の発表。

・読み手は、観客を前に読むことで、原文を全身に取り入れてしまうちょっとしんどい経験をしますが、世代を超えた仲間と出会い、一つの時間を共有します。

・観客は肉声を通じて伝わるＰＷＡやその家族の思いを直接的に感じ取ります。

感　想　（参加者アンケートの一部）

・今日、「声」を聞けて、とても良かったと思います。「声」が「声」として広がり、伝わっていったら素敵です。これからも現実の「声」を心に届けて下さい。(女性・18歳・大学生・横浜市)

・H. I. Voice の存在を知らなかったので、今回、読んでもらって本当に良かった。黙読も必要だけど声を出し読み合うことで、より理解できるとつくづく思いました。(女性・22歳・伊勢原市)

・H. I. Voice を講読しています。感染者や患者の方の気持ちがスーと心の中に入ってくる気がしました。声を出して読むということが、こんなにも大きな力になることを知りました。職場（高校）で、生徒と一緒に声を出して読んでみます。(女性・37歳・養護教諭・高崎市)

連絡先

TEL 045-201-1111 内線5057 岡島

FAX 045-212-8324

H.I.Voice Act ＝朗読ワークショップの項（No. 17）参照

芹　川　藍　TEL 03-3468-7676

（劇団青い鳥）　FAX 03-3468-0445

No. 21	生活者としてのエイズ

主　催／　東京都立駒込病院　ソーシャルワーカー磐井静江

協　力／　匿名２名　　参加者数：４８人

ねらい

ＨＩＶ／ＡＩＤＳというと心の問題としてロマンチィックに捉えたがる風潮がある。感染を知った数週間、投薬開始時、発病時などは不安と混乱が強くなるが、一貫して感染者が抱える問題は生活問題である。医療費の問題や社会保障がどうなっているかを会場の人達とともに考えることによって、生活者としてのエイズの側面への関心を高める。

ながれ

これまで相談を受けた７０以上の事例のなかから数例紹介したあと社会保障制度を使う上で不安になることを健康保険、傷病手当金、障害年金を利用する際の留意点をふまえて説明。３８歳の感染者（高卒、社会保険加入期　間２０年、年収５００万円、単身者、預金残高２５０万円）を心理社会的問題のモデルケースとして紹介。感染を知ってから生活保護申請するまで２年余り、障害年金だけでは生活できず生活保護を受けざるをえなくなるっていく様子を説明。難病、ＨＩＶ感染などは自助努力だけではどうにもならず、社会的応援が必要であり、経済的な面からも感染者を増大させないことがいかに必要かを問題提起した。しかし、今感染している人の生活を安定させていくことも検査率を上昇させる上でも必要である。

次に、感染したことを知った途端に生活の不安が訪れることを意識してもらうため自助努力アンケート調査を行い、参加者の生活レベルを分析。感染しても不安のない生活、自由な病院選びが経済的な面からも実際難しい事を明らかにした。アンケートの結果、会場の生活保障自助努力の備えは参加者全員、安全圏内にいなかった。

アンケートの内容

① 性別
② 年齢
③ 年収
④ 預金残高
⑤ 生命保険加入状況　　入院給付金　　給付日数
⑥ 休業期間の保障
⑦ 年金加入状況
⑧ 予想介護人の充足状況

感　想

エイズを経済的な面から捉えるとお金のかかる病気だと驚いた。自分が感染していたら生活するのが大変だと不安になりました。人ごとじゃないとつくづく思いました。社会保障制度のことなどきちんと説明を受ける必要があると感じました。

連絡先

磐井静江
東京都立駒込病院　ソーシャルワーカー
〒116 東京都文京区本駒込3-18-22
TEL 03-3823-2101 内線2058　FAX 03-3823-2759

No. 22	キリスト者としてＡＩＤＳを考える

主　催／ 東京ＹＷＣＡ　　**協　力／** 横浜ＹＷＣＡ

ねらい　ＹＷＣＡの活動を通して色々な問題を考えるが、ＡＩＤＳに関しては、専門家ではないし、また、宗教家でもないので、宗教的な面から専門的な話をする事もできない。ただ、１キリスト者として感じていることを話し、参加した方々とＨＩＶ／ＡＩＤＳについて共に考えたい。　　参加者数：４０人

ながれ　①協力者の趣旨説明

②**ＡＩＤＳとの関わりについて**：　津田塾大学で健康教育を専門として教えている。「健康」の分野はとても幅ひろく、現在学生に伝えている内容は、「健康とはどういう状態なのか」・「いかに生きるか」というような事。学生がＡＩＤＳについてどの位正しい知識を持っているかアンケート調査をする事がある。結果を見ると、ＡＩＤＳ患者に対する態度などについては模範解答が多く出される反面、正しい認知がなされていなかったり、恐怖心が見受けられる。一般社会を見ても日本はアメリカよりかなり立ち遅れているようだ。例えば、１９９０年国連の政府代表代理としてニューヨークにいた時、世界ＡＩＤＳディのあることを初めて知り、国連ビル内で催されたＷＨＯ主催の集会に出席したが、その当時日本ではまだ取り上げられていなかった。（１２月１日を世界ＡＩＤＳディとする事は１９８８年に設定されていた。ちなみに国連では、健康・女性・障害者・貧困・人権など、生活に密着した問題にも取り組んでいる。）

③**ＡＩＤＳとは？キリスト者としてどういう価値観を持っているのか**：　「同性愛」の問題は道徳の問題ではなく、生理学の問題である。聖書を持ち出して相手を裁くのは危険である。性を含めた個人の行動については、各々の考えに基づいて話し合い、認め会う過程が必要。ＨＩＶ／ＡＩＤＳ感染者に対して、アメリカでは「患者」ではなく「クライアント」（依頼者）という言葉を使う。彼らを疎外するのではなく、共に生きる仲間と考えるのである。苦しみを通してキリスト（無条件に自分を理解してくださる方）と出会い、喜びを得る。人間は体験しないことはなかなか理解できない。宗教の役割は、人間の限界を知った上で、絶対者の前で自分と向き合うようにさせる事であろう。カウンセリングとは、その技術を学ぶ。相手に答えを与えるのではなく、相手を思いやる事である。

④**ＡＩＤＳと経済**：　ＡＩＤＳには１５～４０才の働き盛りの人が多く感染している。残されるのは老人と子供。その家族の経済を支える事とともに、社会を支えて行かなければならない。

⑤**ＡＩＤＳとＹＷＣＡ**：　１９８７年ＹＷＣＡ世界総会で初めてＡＩＤＳに関する決議が出された。「ＡＩＤＳ予防教育の実施」・「ＡＩＤＳ問題と人権問題を考える」など、各国ＹＷＣＡがＡＩＤＳに対する運動を活発に行っている。

感　想　人間が生きていくには、生きる基盤がある事＝支えと考える。誰もが生まれる意味を持って、極限でも生きていける事。日本の社会では「役に立つ事、効率的に生きる事」が精神になっている世の中なので、聖書を通して神に問いかけられた時、現状に目を背けい、自分でしっかり見据える事が大切だと感じた。

連絡先　東京ＹＷＣＡ
〒101 東京都千代田区神田駿河台1-8　TEL 03-3293-5421

Ｎｏ．23	男と女の性教育

主　催／　横浜エイズ勉強会

ねらい　ワークショップを通し、自分の性と躰を認識してもらう。　参加者数：３９人

ながれ

①現在の性教育の現状と問題点

・エイズ予防に呼応する形で、学校保健でも、性や躰について学習するようになったが、一方で今だに父権社会における性のダブル・スタンダードは存在し、マスメディアは支配者と非支配者という形でセックスを卑しめ、ねじまげている。

・一人一人が自分自身の躰の主役となり、自らの性を卑しめることなく、親子・夫婦・恋人が自由に語れる環境づくりを目指す必要がある。

②コンドームネゴシエーション

・性行為は男性主導で行うものと考えられている日本においては、女性から男性にコンドーム使用を促すことは非常に困難である。ネゴシエーションは二人一組となって恋人同士の対話を行い、コンドーム装着なしのセックスを望む相手を説得し、使用を導いていくシュミレーションである。今回のワークショップ初体験者多数のためフォーマットシナリオを用意した。

③ジェンダー・セックス

・「男らしさ」「女らしさ」として強調される性幻想は、自然なものではなく、観念的につくられた概念であり、さらに性別役割と思われていたものも流動化しているのが現状である。性交ひとつとっても、アウターコースのような、自分達で新しいルールを決めて行くことができるはずである。そうした変革が互いの人格を尊重しあう「to be sex」という言葉の提唱へと繋がっていくのだ。

感　想

・性教育は家庭内でも徹底させる必要があり、小さい時から性教育をし、思春期ではもっと性について親しみを持つようであってほしい。また、性の知識だけでなく、コンドームネゴシエーションを行う等、口に出す性教育も大切。

・男女がお互いに相手を想う関係をつくることが必要。例えば、女性は男性がコンドームを使いたくない心理について理解してほしい。

・今までのメディアからの性に対する認識を自分の中で昇華して、いろいろな視点から性を見つめる姿勢が持てた気がする。見ず知らずの人とＳＥＸやコンドームという言葉が自然に口に出せる自分に驚いた。

・今までの偏った性認識がくずれて新鮮な感じがする。

連絡先

高村文子

〒231 横浜市中区常盤町1-7

横浜YMCA会員サービスセンター

TEL 045-662-3721　FAX 045-651-0169

活動日

毎月第１・第３土曜日 18:00～20:00

No. 24	プライマリケアとＡＩＤＳ

主　催／　ＨＩＶと人権・情報センター（医療部会長・武田淳、吉永陽子）

ゲスト／　西村クリニック院長・西村有史、鈴木歯科クリニック院長・鈴木治仁
秦野保健所医師・岩室紳也　　参加者数：６５人

ねらい

昨年開催の第１回同フォーラム内でも行なった企画。ＰＷＡ／Ｈにとって医療機関の拡大は必須である。生活を営む地域内での安全な診療が可能になることは、ＨＩＶに感染しても生活の質を守っていけることにつながっていく。その必要性を前回同様提起した。

ながれ

①前回内容の報告（武田淳）（概要説明（吉永）を含め１５分）
・医師、ＰＷＡ／Ｈ、保健所等地域活動従事者など様々な立場からの考察を行なった。
・ヘルシーキャリア（ＨＩＶに感染しているが、日常生活に支障はなく発症していない状態）の段階では、専門（総合）病院でなくても対応できる。（定期的な採血や検診など、地域の開業医でも可能）拠点病院＋αで考えていくことが重要。
②ＰＷＡ／Ｈのボランティア活動を通じて－反省と今後の期待－（武田淳）（２０分）
・多くのＰＷＡ／Ｈは、検査、医療機関から特定の専門病院を紹介されているなど。
③地域活動の取組み１．内科（西村有史）（２０分）
・勤務医時代にＨＩＶ診療に携わり開業に至るまでの経過。・後方病院の確保が課題。
・ＰＷＡ／Ｈのいる場へ出掛ける医療（開業医ならばそれが比較的可能）。
④地域活動の取組み２．歯科（鈴木治仁）（２０分）
・大学病院等勤務を経て開業医に。ＨＩＶに限らず、診療拒否などを心配し患者側が話さない場合もある。それを前提に予防、消毒を行なっている。・ＨＩＶ診療に関しては、他の患者に知られない、ゆっくり話す時間を持つという点を心がけている。
⑤現在までの神奈川県におけるＨＩＶ診療の動きと今後の期待（岩室紳也）（１５分）
・神奈川県は拠点病院よりも受入病院推進していく方法を取っている。
・医師がＨＩＶ診療を行いたくても行なえない状況（偏見）もある。
⑥討議／仲間作りのために－何ができるだろう？（３０分）
・生活面等も含めサポートできるチーム作り（ネットワーク）。
・保健所、ヘルパー、ボランティアとの連係で地域医療を充実させていく。

感　想

・参加者には保健所や医療、行政関係者なども見られ、それぞれの立場からの疑問や現状など活発な意見交換がなされた。
・医療機関のみでなく保健所等も地域によりその対応にはバラツキがあり、良い所をモデルとして発展させていこうという意見などがでた。

連絡先　ＨＩＶと人権・情報センター
（東京）〒101 東京都千代田区神田司町
2-17-4風間ビル2F
TEL & FAX 03-5259-0622
（全国）　TEL 03-5256-3534
TEL 0720-43-2041

活動概要
・ＰＷＨ／Ａによる自助グループ及びリビングセンターの運営　・相談電話の常設
・ケア・サポート　・機関誌の発行
・医療機関の開拓　・学会への参加、発表
・知識の普及活動　・国会、行政への要請

No. 25	アウトリーチが語るＡＩＤＳの啓発活動

主　催／　ＡＩＤＳケアプロジェクト

ねらい／　アウトリーチ活動の状況や理念、目標の紹介

参加者数：７０人

ながれ

①活動紹介

電話相談「ＡＩＤＳ110番」、ゲイの為の電話相談「ゲイメンズホットライン」、ＰＷＨ/Ａ専用電話相談「心のホットライン」、ＰＷＡ/Ｈサポートシステム「伴走者システム」他。

②アウトリーチ活動について

・エイズへの関心が薄らいでも、感染者は増え続けているのが現状である。人々が無関心を装っているならば、こちらから出向き、今忘れてはならないエイズついての啓発活動を続けている。

・実施するに当たっての注意点は、アウトリーチを行う理念や目標を統一し、計画や活動、運動を行って行く事である。（配布物の内容に大きく影響する）

③アウトリーチの理念目標

ａ．エイズの感染拡大と防ぎたい。

ｂ．エイズに対しての各種の情報提供を行う。

ｃ．エイズに対する正しい知識を広め、誤解や偏見や差別をなくしたい。

ｄ．持ち帰って中身をよく読んでもらいたい。

ｅ．内容によっては保管をしてほしい。

④配布の内容物について（今までに配ったもの…）

ＨＩＶ・ウイルスの知識、検査箇所の紹介、陽性告知後の情報、電話相談箇所の紹介、エイズを取り巻く社会状況、イベント／セミナーの案内、コンドーム、当団体の紹介、ボランティアの募集、他

⑤実施箇所について…（　）内は数字は実施箇所の総数

・新宿(3)渋谷(3)池袋(1)中野(3)お茶の水(1)代々木(1)原宿(1)世田谷(1)

・新宿２丁目について…エイズ＝ゲイと言う考え方ではなく、他の箇所と同じ比率で実施している。受け取る率と関心度は他の箇所をはるかに凌いでいる。

・実施箇所や年齢層を考慮し、配布物内容を考える。いつも同じで物はだめ。

⑥アウトリーチ活動の感想

・配布後に捨てられていないかを見て廻るが、捨てられている数が少ない。

・配布中に話しかけられ、エイズについて話せるのがうれしい。

・図案を考え、印刷をし、一個一個手で折り、袋に詰める作業には時間がかかる。

感　想

・ボランティア活動としての限界のなかで、必要なメッセージをたくさんの人に伝えるのはとても大変なことであると思った。

連絡先

ＡＩＤＳケア・プロジェクト
〒156　東京都世田谷区赤堤2-44-3-101
TEL & FAX 03-3378-9095

ボランティアスタッフ募集中

No. 26	ＨＩＶ診療と看護のこつ

主　催／ 相楽裕子、小谷優子　　司　会／ 岩室紳也

ねらい

ＨＩＶ感染症に携わっている医師、看護婦からＨＩＶ感染症／ＡＩＤＳ患者の診療と看護の実際について具体的な話を聞き、医療関係者、ボランティア、ならびに一般の人がＨＩＶ診療の問題点についてともに考える機会とする。　　参加者数：７０人

ながれ

相楽医師

以前は東京の病院で、現在は横浜市立市民病院で感染症科の医師としてＨＩＶ感染者の診療をしている。感染症科は総合的な全身管理の立場で患者を診ているが、呼吸器、その他の局所的な臓器に異常所見があれば、その専門科に紹介して診てもらっている。そうすることで病院内の受け入れ体制が出来てきた。大切なことは、医療従事者が偏見、差別をもっている間は一般の差別はなくならないということをみんなが認識すること。

小谷看護婦

患者の受け入れを始めた当初は正確な知識からではなく過剰に反応して、配転を希望する人がかなりあった。しかし、２～３カ月間、患者に実際に接した体験から、過剰にマスクをしたり、配転を希望する人がなくなった。ＨＩＶ陽性であれば、限られた生を生かしてあげることが重要である。

診療と看護のポイント

患者のプライバシーを守る、病院は患者を全面的に支援する、感染経路を責めてはいけない（内科の医師は性病にこだわる傾向がある）、患者には真実を告げる、患者をサポートする人が必要、甘えがでてくる患者も他の患者と同じように扱うこと。今後は訪問看護制度が確立され、自宅に帰る事がもっと増えるといい。

質　問

・看護する上で一番大切なことは→特にはないが、患者が日和見感染を起こさないように患者に勉強してもらう。
・ＨＩＶ／ＡＩＤＳに対して差別意識をもっている人に対してどのようにすれば良いか
　→実際に診療や看護の経験をするのが一番。
・医療関係者自身に対するサポートは→市民病院ではリエゾンナースを置いて、特に看護婦の精神面のサポートをしている。

感　想

・実際に治療に携わっているナースのお話がきけて、自分もやれるという安心感がわいた。（女性：看護婦）
・現実に即した具体的な話が聞けて大変よかった。
・姉が看護婦で、そこの病院では感染科で肝炎を扱っているが看護婦は特別視していない。しかし、その病院ではエイズの患者さんを受け入れる予定がないのを残念に思った。

連絡先

相楽裕子　：感染症科医師
小谷優子　：感染症病棟看護婦
〒240 横浜市保土ケ谷区岡沢町56　横浜市立市民病院　TEL 045-331-1961

Ｎｏ．27	エイズ・教育・人権

主　催／　性を語る会　代表・北沢杏子

ねらい

「エイズ・教育・人権」をテーマに、小・中・高、知的ハンディを持つ人々を対象とした授業をスライドを使い各段階別に具体的に紹介、ＰＷＡ／ＰＷＨの立場になり、参加者の一人一人が深い理解と支援のこころを持ち、自分なりに行動することが社会を変える力となると結んだ。　　参加者数：８９人

ながれ

模擬授業「高校生のためのＨＩＶ／ＡＩＤＳ」(サンフランシスコ市教育委員会プログラム)

１０代の人々に対しての予防を参加者が行う。

①ＨＩＶの知識　予防としてのコンドームの付け方

コンドームの正しい使用方について生徒役を参加者が行い、実際手に持って説明する。

・コンドームの裏・表の区別・製造年月日を確かめる・最初からつける・根本まできちんと付ける・終わったらすみやかに撤去する・爪などでひっかけない。

②入院中のＰＷＡのクラスメートを見舞う

クラスメートに何かと言葉を掛けるかについて、会場を２、３人のグループに別け、５分間グループ討論を行う。（心理学トレーニング）５、６人に発表してもらう、そして、ＰＷＡ本人の立場になり何が一番して欲しいことかを一緒に考える。

③ＰＷＨ／ＰＷＡから直接話しを聞く

④①～③の復習、話しをしてくれたＰＷＨ／ＰＷＡに手紙を書く（５０分）

→教材・エイズの感染経路「うつる・うつらない」を参加者がパネルに張り、正しい知識の再確認をする。（１０分）→ビデオ教材－コンピューターグラフィックによる「よくわかるエイズ」を上映、免疫のシステムや体内の細胞のはたらきを知る。（１５分）→「エイズと生きる人」（ビデオ）の一部、平田豊さんのメッセージ”どうやって死ぬのかということは、どう生きるかということだ””自分は最期まで明るく生きたい”を見る（５分）→スライドにて「薬害エイズ・あやまってよ　９５」「小・中・高学生、知的ハンディーを持つ人々に対しての模擬授業」また「キルト」「エイズデイ」「レッドリボン」について詳しく説明。（３５分）→性教育は自分の命を大切に、どうより良く生きているかを考える教育「自己判断力」「自己決定力を養い、相手の人権を尊重し共に生きる社会ができるよう自分から行動しよう。

感　想　・コンドーム教育で恥ずかしさを感じさせないのには、驚きました。高校生の時にこんな授業が実際にあればよかった。（現在２１歳）

連絡先

性を語る会・事務局

〒158 東京都世田谷区用賀3-5-6

TEL 03-3708-7326　FAX 03-3708-7324

No. 28	エイズ時代の愛と性

主　催／　北村邦夫（日本家族計画協会クリニック所長）

ねらい

思春期のクリニックを通して見える現代の若者の性の問題点を通して、ＡＩＤＳ予防について具体的に考える。　　参加者数：１５３人

ポイント

・避妊とエイズ予防

ピルを認可すると男がコンドームを使わなくなるからＨＩＶ感染が蔓延するというのが政府の考え方。ピルやコンドームを使うかどうかはカップル２人が相談して決定すること。それができる間柄を作るべき。わが国の場合、コンドームは避妊を目的としては使われるが、ＳＴＤ感染予防のためには使われる可能性は少ない。

・愛情と感染予防

愛情があるからと言って全て信用できるかどうかはわからない。ＨＩＶ感染の事実や可能性をセックスのパートナーに伝えられないためＨＩＶ感染が蔓延する。パートナーに言いたいことを率直に言うことは人間が最も不得意とすることだが、言えれば予防を貫き通せるはず。お互いのセックスの経験の有無を言い、抗体検査を一緒に受けることが必要で、過去を否定するのではなく受容しよう《いいセックスの実現》。「愛してる」という言葉ではエイズには勝てない。

・感染の３原則とは

①ＨＩＶがあること

②感染経路（セックス）があること

③あなた（感受性のある個体）がいること

・感染する確率は０．１％～１％であっても０％ではなく、たった１回でも感染する。

・ＳＴＤをもっていると感染しやすい。

・あなたにとってセックスって何ですか

人間には自我（動物としての人間）に社会性・理性・常識という鎧かぶとをまとっているが、セックスとはその鎧を取り払う行為だと思う。そのような時に、コンドームを使うこと、使い続けることは難しい。男のペニスにつけるコンドームで女性が妊娠することは止めなくてはいけない。避妊とＳＴＤ予防とは別問題として考えるべきだ。

感　想

・避妊のことやＳＴＤなど、自分も身近に感じているのだけど、なかなか知る機会のないことを、ユーモアを交え、楽しく聞けたので勉強にもなり、いい講演会でした。私も彼とエイズの検査に行こうかなと思います。

・ＳＥＸについてまた考えることができた。

連絡先

北村邦夫

〒162 東京都新宿区市ケ谷砂土原町1-2　保健会館別館5Ｆクリニック

TEL 03-3235-2694　FAX 03-3267-2658

著書：「カラダの本」（講談社）、１０代の後輩におくる僕のエイズ教育（日本家族計画協会）、他多数

Ｎｏ．29	ＡＩＤＳと同性愛

主　催／　エイズアクション

ねらい

ＡＩＤＳは性行為による感染が多い。性行為に対する差別意識があると、ＡＩＤＳに対する差別意識も起きる。ＨＩＶ感染者を排除する場合の多くは、このような差別意識、とりわけ同性愛に対する無知からの差別が多いと思われる。そこで、ＡＩＤＳと同性愛について問題提起をし、考える素材としたい。

参加者数：４３人

ながれ

①主催者の自己紹介（５分）

②性的指向と性的嗜好の違いについて（４０分）

性的指向とはSexual Orientationといい、性的嗜好とはSexual Referenceという。この違いは性的指向とは生まれながらにして同性愛者であって、それは変えることができないということである。性的嗜好とは趣味のように性の対象を変えるということで、同性愛者のことをいうものではない。単なる性の遍歴者としかいいようのないものである。同性愛者は性的指向が同性に向かうということで、それはどう仕様もない。したがって、これを努力によって変えたりできる、勝手気儘に同性愛者になっていると解釈されることは、非常に困ることである。

③グループ・ディスカッション（３０分）

④フロアーからの意見と質問（４５分）

・「同性愛は性的嗜好ではない」というけれども、性行為の相手を何人も選んでＨＩＶに感染した人がいる。「性的に選ぶことはできない」というのであれば、これらの感染者を差別することになるのではないか？

・同性愛者社会的に差別を受けている。血友病患者は国家的に差別されている。差別されている者同士が連帯できないはずはない。

感　想

・性病に対する日本人の意識が「汚い」「隠す」というところがあるから差別が生まれる。

・専門的でむずかしかった。

・グループディスカッションと質疑応答があったのでよく理解できた。

・血友病と同性愛の連帯は出来ないのか？

連絡先

エイズアクション（南　定四郎）

〒162　東京都新宿区市ヶ谷薬王寺70
ブラザー若松301
TEL & FAX 03-3235-5071

Ｎｏ.30	在宅・地域ケアの一環としてのバディ

主　催／　ぷれいす東京　ぷれいす東京代表　：　池上　千寿子
バディ・スタッフ　：　岩永啓子、柳沢ゆみ子、生島　嗣

ねらい　孤立しがちなＨＩＶ感染者・ＡＩＤＳ患者のために、在宅サービスをバディ・サポートとして提供してる。私たちの事例を通じ、地域の中で医療・行政と協力しながら在宅支援を提供する試みが、より多くの地域でも広がる事を期待する。

参加者数：５５人

ながれ　①（ぷれいす東京とは）

ぷれいす東京は地域に根ざした活動を通じて、ＨＩＶ／ＡＩＤＳという一つの病気による問題を抱えている人達が、ありのまま（自分らしく）生きられる環境（コミュニティ）を作り出すことを目指し活動している。

②（誰のためのサポートか）

バディサービスとは身内や友人以外からのサポートを求める『ＡＩＤＳ発症者やＡＲＣ状態の人』から依頼をうけサービスを提供する。依頼者をクライエントと呼んでいる。バディの依頼は医師や医療ソーシャルワーカー経由のものや、本人から直接依頼される場合もある。

③（どのようなサポートか？）

バディは友達、パートナー、家族、専門家でもない、病気をきっかけとしたバディという新しい関係でクライエントをサポートすることを目指している。ですから、バディの主目的は、何かをしてあげるではなく、彼らができるように助けることである。バディはクライエントの自立を尊重し、応援するよう心がける。そうした関係の中でバディはクライエントと共に悩み、苦しみ、喜びあうことを通じて彼らのＱＯＬ（Quality Of Life)を高める手伝いをする。私達はプログラムとしてバディを派遣している。多様なニーズに応えるために、幅広い層のバディ・スタッフを必要としている。

④（地域のなかで）

医療従事者（病院の医師、看護婦、ソーシャルワーカーなど）・保健所や福祉事務所などの行政の職員（医師、保健婦、事務職）・他の民間団体などと協力、連携をとりながら、地域のなかでＨＩＶ感染者・ＡＩＤＳ患者をサポートする事例が出てきている。互いの違いを生かしながら協力していくことを通じて、よりよいサポートを提供することが出来るようになると期待している。また実際の活動の経験の中から社会のシステムを変えていくための提言なども行っている。

⑤（事例から）

女性に対するいくつかのサポートの事例を通じ、今後の問題を考えた。カップルの片方だけが感染した場合、両方が感染していた場合、子供だけが残された場合の問題など、実際にケースにかかわると様々な問題がみえてくる。女性は子どものケアや家族を優先して自分に対するケアは後回しにしがちである。女性の自立、生殖の権利などの意識啓発や、根強い感染への差別の撤廃など、女性自身が自己選択しやすい環境づくりが急がれている。また、さまざまなニーズを持った感染者をサポートするために、カップル、セックスなど、多様なカウンセリングのあり方が必要とされている。

⑥（質疑応答）

バディのトレーニングはどのようにされるのか？　どんな人がバディになれるのか？　家族とバディのつきあい方は？　経済的な問題は？　医療情報に対しての態度は？　在宅と入院でのサービスの違いは？　外国で始まったシステムが日本の中でうまく機能するのか？　など沢山の質問を頂きました。

この後、バディとして活動に参加を希望する方も数名いた。

連絡先

ぷれいす東京

〒161 東京都新宿区下落合1-3-6
ハイシテイ高田馬場
TEL 03-3361-8964　FAX 03-3361－8835

参加希望スタッフを募集しています。
左記まで連絡いただければオリエンテーションの案内を致します。バディの他にも電話相談、ゲイ・グループ、事務総務などの活動もあります。
賛助会員も同時に募集しています。

Ｎｏ．31	エイズを生きる－LOVE of LIFE with AIDS－（写真展）

主　催／　土橋正之

挨　拶　（写真展より）

エイズという病気が１９８１年にアメリカで発見されてから、僅か１０数年の間に全世界のＨＩＶ（エイズを引き起こすウイルス）感染者は、推定で１，９５０万人をかぞえ、３～５００万人の尊い命がこの病気で失われました。（ＷＨＯ，１９９４年末）

私は平成四年度文化庁芸術家在外研修員としてアメリカに１年滞在した折りに、日本では数字や統計が先走りする観があるＨＩＶ／ＡＩＤＳの実績を写真を使って捕らえられないかと思い立ちＨＩＶ感染者、ＡＩＤＳ患者をたずね歩き、写真とインダビューでまとめ上げました。その過程で私が見たのは病気だけではなく偏見や差別とも闘う感染者と、この状況を克服しようと努力するアメリカ社会の姿でした。

９４年に横浜で開催された国際エイズ会議で出会った感染者が、こんな話しを私にしてくれました。「エイズという病気は人種や年齢、宗教といった一切の関係の区別なく人種のすべてに襲い掛かる病気だ。いまこそ私たちは、互いの違いを乗り越え、一つの目標『エイズ克服』にむかって人類の英知を結集させる時がきた。もしかすると『エイズ』はそれを教えるためにこの地球上に表れた病気ではないか。」

いま、一人ひとりが、身近かな問題として「エイズ」をとらえ、正しい知識を身につけることが、自らをＨＩＶ感染の危険から守りすでにＨＩＶに感染した友人を受け入れる社会作りを可能にします。

全世界の人口を５７億人とすると、人類の約３００人に一人がＨＩＶに感染している計算になります。いまやエイズは決して他人事ではありません。

今回、ここに展示した写真をご覧いただいた皆さんが「エイズ」という病気に関心をもって、さらに知識を、そして理解を深めるという機会となることを心から願って止みません。本日はご来場ありがとうございました。

感　想

・日本の感染者にも、こんなふう堂々と笑って暮らせる環境を一日も早く。（18歳女性）
・何よりも、写真の中の人々の生き生きとした明るい表情が印象的でした。（23歳女性）
・「行為やモラルに対する神の審判ではない」との一言の当たり前に気づく。(24歳男性)
・アメリカでのＨＩＶ陽性者の生きている（笑っている）姿に心打たれます。(27歳女性)
・エイズは他人事でなく、普通の人が、自分の事として体験することを痛感。(38歳女性)
・一つ一つの写真から伝わる暖かさ、明るさは何処から？ ﾒｯｾｰｼﾞ性が高い。（54歳男性）
・我々は一体何のために生きてるのか？写真の人達が問いかけているようだ。(47歳男性)

連絡先

土橋正之

〒154 東京都世田谷区三軒茶屋1-10-5
TEL 03-3418-1131

ＡＩＤＳ文化フォーラムへの取り組み
－かながわエイズボランティア育成講座（夏期コース）－

今回のエイズ文化フォーラムには、かながわエイズボランティア育成講座（夏期）の受講者たちが、フィールドワークとして運営ボランティアを体験学習しました。

受講者は、事前研修で、ＡＩＤＳの基礎知識とボランティア概論を受講した上で、会場整理や記録、受付という様々な運営をボランティアとして体験し、全国各地から集まった参加者を迎え、ＰＷＡ／Ｈの方々に出会い、ＨＩＶ／ＡＩＤＳの最新情報にふれ、ワークショップやディスカションの中でエイズ問題の種々の側面の理解を重ねました。

この講座に参加した幅広い世代の受講者たちは、文化フォーラムでの貴重な体験に感謝するとともに、仲間づくりの中で自分にできることは何かを、今、探り始めています。

◆ＡＩＤＳについて、いろいろお話しを聞くことができたので、とても身近な問題として考えることができるようになりました。講師の方々はもちろん、ボランティアの間でも、素敵な人達と出会えることができ、楽しい時間を過ごすことができました。
　運営スタッフとしては簡単なことしかできなかったけれど、自分もフォーラムを作っている一人だと感じられて、とても嬉しかった。（学生　22歳　女性）

◆講座とフィールドワークを通して、エイズと闘っている人々、そして一生懸命サポートしている人々と直接会えて、’95夏、私にとって貴重な経験となりました。ボランティアの中でも親しい人はできたが、もっと互いの自己紹介の場が欲しい。（　58歳　女性）

◆幼稚園から高校は、ミッション系だったの無償で働くのは普通のことでしたが、しばらく遠ざかっていたので改めて新鮮で自分自身のためになりました。もっと仕事があっても良かったです。ＹＭＣＡでの講座は基礎的なものが多く、知識の確認や再認識にはなったが、発展的 or 実戦的ではなかった。ＡＩＤＳ文化フォーラムは、わたしの考えていたよりもずっと開放的、進歩的で非常に自分のためになった。（ﾌﾘｰｱﾙﾊﾞｲﾀｰ 25歳　女性）

◆この講座に参加して、本当に良かったと思います。とくに文化フォーラムのプログラムが勉強になりました。ボランティアにもいろいろな形があるのがわかりましたし、１つのこの「エイズ」というもののとらえ方でも人によって色々で興味深かったです。ＰＷＨのポジィティブな生き方には、自分の人生を反省したりもしてました。それとこの講座をきっかけに日本の社会の在り方も考えさせる面があり、私は看護婦を目指しているので、エイズだけでなく、いろいろな病気についても、それをとりまく社会について考えていきたいなと思います。ボランティア育成講座という面では、直接すぐできる事は、自分でみつけなければならないという当たり前のことに気づきました。でも、これからの自分の活動方針は決められました。ＰＷＨにかかわる直接的なボランティアを希望するので、ある団体の「バディ・オリエンテーション」に参加してみます。（看護学生　27歳　女性）

◆ボランティアによる、ボランティアのためのフォーラムという形は、本当にすばらしいと思った。ＡＩＤＳ以外のいろいろな市民運動にも、ぜひまねしてほしい。内容的にも多様性に富んでいて得る所が多かった。参加者の多かったこと、またその熱心さに驚いた。会場に集まった大きなエネルギーを少しでも、持ち帰って一人ひとりの周りの人に伝えていけるものとなって欲しい。（　34歳　女性）

◆ボランティアの主内容が、イベントの企画・運営におかれているという点で、自分が求めていた、考えていたものと異なっていた。ある講師の「死の直前まで、人間の尊厳は失われない」というコメントに感動した。また別の講師の「何故AIDSのボランティアなの？他にできることは沢山あるのに」との問いには、「興味があるから」と答えたい。興味から始めていいと思います。始めなければ何も起こらない。（歯科医師　35歳　男性）

◆ＰＷＡと共に生きれる社会…　それは弱者にとって生き易く、心豊かな社会です。そんな社会作りにささやかな力ですが参加させてもらいます。「エイズ」をきっかけに「良い社会とは…」そんな話しのキッカケにしたいものです。若い人達が、いろいろな形で、真剣に参加されている姿に接し、とても心強く感じました。（会社員　46歳　男性）

（講座に参加したボランティアの皆さんの感想文をアンケートより転載しました。）

（参考）ボランティア育成講座の概要を紹介します。

AIDS
ボランティア育成講座

Ⅰ　かながわエイズボランティア育成講座（夏期コース）

エイズボランティア育成のための総合講座（基礎知識から、応用活動まで）

日　時　：①1995年7月22日(土)・29日(土)・8月5日(土)・9月2日(土)　１４：００～１７：００
　　②1995年8月11日(金)・12日(土)・13日(日)　10:00~20:00　（この中から日時選択）
会　場　：①横浜ＹＭＣＡ会議室（中区常盤町１－７）
　　②(財)神奈川県国際交流センター会議室（中区山下町２産業貿易ｾﾝﾀｰﾋﾞﾙ９Ｆ）
受講料　：無　料
参加数　：７０名（定員50名のところアッという間に満員となり70名まで受ました。その後は、秋期コースの予約ということで対応しました。）
主　催　：神奈川県・横浜ＹＭＣＡ
事務局　：横浜ＹＭＣＡ ﾜｰﾙﾄﾞ・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ・ｾﾝﾀｰ（☎045-662-3721）

かながわエイズボランティア育成講座プログラム

①夏期コース

講座日程	講座会場	講座概要	講師等
7月22日 （土） 14:00~17:00	横浜ＹＭＣＡ 会議室	・オリエンテーション ・地域レベルのボランティア ・ＡＩＤＳ文化フォーラムへの取り組み	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ 西浦うらら 長沢　勲
7月29日 （土） 14:00~17:00	〃	・ＡＩＤＳの基礎知識 フィールドワークについて ・ウィルスから見たＡＩＤＳ	医師 吉永　陽子 都立衛生研究所 玉川　重徳
8月5日 （土） 14:00~17:00	〃	・サンフランシスコにおける ＡＩＤＳ地域サービス ・ＡＩＤＳ患者のニーズと ボランティアに期待するもの	ｻｲｺﾛｼﾞｽﾄ 河野　通子 横浜市大病院婦長 折津　礼子
8月11日 （金） 10:00~20:00	神奈川県 国際交流協会 会議室	フィールドワーク（文化フォーラム参加） 第２回 AIDS 文化ﾌｫｰﾗﾑ（1995 AIDS文化ﾌｫｰﾗﾑin横浜）の運営に参加して、ボランティアの実際を体験する。 また、全体で３０項目以上あるフォーラムの中から興味を持つプログラムを３つ以上選択して参加する ●文化ﾌｫｰﾗﾑ 実行委員とともに、運営ワーク（展示作業・会場整備・受付・連絡調整・進行補助・記録）に参加し、一つのイベントを運営することを実施体験していく。	
8月12日 （土） 10:00~20:00	〃		
8月13日 （日） 10:00~20:00	〃		
9月5日 （土） 14:00~17:00	横浜ＹＭＣＡ 会議室	・フィールドワーク実習体験発表 ・具体的な活動へむけての ディスカッション	ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ 西浦うらら 長沢　勲

☆かながわエイズボランティア育成講座は、この他に秋期コース（11月中旬~12月中旬）及び秋期コース（2月中旬~3月下旬）を開催する予定です。

「ＡＩＤＳ文化フォーラムに参加して」　横浜いのちの電話　小島隆士

ただ会議に出席していたというだけのような実行委員でしたが、３日間のプログラムに参加して、多くの啓発活動に参加しているメンバーの方に会い、実際の活動の内容を見たり、聞いたりしていくうちにだんだんと胸に熱いものがこみ上げてくるのが感じられるようになりました。「今、何をして？これからどう関わっていくのか？」「今は、これからは、何ができるのか？」「今、何をしなければならないのか？これからどうしなければならないのか？」等私にとっての課題が頭の中でぐるぐると回っているのが現状です。「かけ手の悩みや、不安を良く聴き、少しでもかけ手の心を癒す助けになれるよう電話相談員として活動すること」今までの活動の中での関わりを大事にし、自分のできることを一つ一つにして、息の長い活動をして行きたいとおもいます。

「１９９５ＡＩＤＳ文化フォーラム感想」　横浜ＹＷＣＡ　久慈美代

まさか自分が実行委員に加わるとは！初めての委員会の場は恐怖の一言。
なにせ、全員がその道のプロ、専門家なのです。針のムシロとはこの事だと痛感した日でもありました。が、今は皆さんと出会え、少しでもご一緒に働けた事を感謝しています。やはり、知らないよりは知っていた方がいいし、やらないよりはやった方がいい。一つ一つ身になっていくのですから。今回、痛感したことは、いつの時代も新しい病は出現する事。しかし、あれ程日本中を震撼させたＨＩＶ／ＡＩＤＳも、いつの間にか日常生活からすっかり忘れ去られている事実があります。『ＡＩＤＳ文化フォーラム』を通して、おなじみの顔、新しい顔と出会い、皆さんの意識の高さにはいつも驚かされます。が、次回行う時には、私のようなＨＩＶ／ＡＩＤＳに意識の薄い人でも『あっ行ってみよう！』と思う会になったらと心に思うのです。

「女性」として「地域」に生きることを目指しながら　吉永陽子

地域というキーワードにひかれて第１回目のＡＩＤＳ文化フォーラムに参加した。２回目の開催こそが、「地域」たる所以だと思っていたので正直言って実行委員の依頼があった時は嬉しかった。しかし国際会議の盛り上がりはどこへやら、逆風が強く、どこまで積極的に参加できるか自信がなかったが、できる範囲で継続していく事こそ大事だと思い実行委員会参加とプログラムの一つ「女性とエイズ」を引き受けた。「感染の自業自得論」「他人事」という声の中でエイズとの共生には膣を共有する「女性」としての「痛み」の共感が必要なのではと考え、入場は女性のみとした。「逆差別」ではという声に代表されるクレームがあり事務局には迷惑をかける結果となってしまった。ＡＩＤＳ文化フォーラムを通して最近考えているのは、「地域」を対象に保健所に勤務しているが、果たして「女性」として本当に私自身は地域に生きているのだろうか。これが今後の課題である。

資　料　編

資　料　編　目　次

関連新聞記事等

44ページ　：　8月20日（日）　神奈川新聞　「土橋正之さん」
45　：　5月15日（月）　神奈川新聞　「継続は力なり」
46　：　8月4日（金）　神奈川新聞　「広い視野で対話重ねて」
47　：　8月4日（金）　読売新聞　「エイズ問題を考えよう」
47　：　8月4日（金）　東京新聞　「エイズに地道な取り組み」
48　：　8月5日（土）　毎日新聞　「幅広くＡＩＤＳを考える」
48　：　8月11日（金）　朝日新聞　「エイズ理解継続訴える」
48　：　8月11日（金）　神奈川新聞　「エイズ、偏見なくして」
49　：　8月13日（日）　神奈川新聞　「エイズ問題熱く討論」
50　：　8月15日（火）　神奈川新聞　「市民の関心実感３日で2200人参加」
51　：　8月12日（土）　神奈川新聞　「米国の感染者との対談」
51　：　8月12日（土）　読売新聞　「市民版エイズ会議開幕」
51　：　月刊かながわ１０月号　「'95ＡＩＤＳ文化フォーラム・イン横浜」
52　：　看護教育１０月号　「ＡＩＤＳ／ＨＩＶへの無理解・無関心を打ち破りたい！」
「1995 ＡＩＤＳ文化フォーラム in 横浜」開催

8月20日（日）　神奈川新聞

この人

土橋（どばし）　正之（まさゆき）さん

エイズへの誤解を言葉以上に打ち消しました

「エイズは特別な人の病気ではない。ごく普通の人の病気。それを伝えたかった」

横浜で行われた市民版エイズ会議「エイズ文化フォーラム」の中で、米国のＨＩＶ（ヒト免疫不全ウイルス）感染者の日常の姿などを紹介する写真展「エイズを生きる」を開いた。中学生、高校教師、画家、主婦…、人種、年代もさまざま。一人一人の姿は「同性愛者だけの病気」など、エイズにまつわる誤解と偏見を言葉以上に打ち消す。同名の写真集（岩波書店、一四〇〇円）も出版した。

一九九二年、文化庁の芸術家在外研修員としてアメリカに渡った。十一月のある日、ワシントンポスト紙の見出しに目を引かれた。「エイズ感染者、国内で百万人超す」。「特別な人だけの病気ではない」との思いから感染者支援グループを窓口に取材を始めた。家族ぐるみで感染者と接するなど交流の輪はニューヨークからハワイまで米国全土に広がった。

日本人写真家として初めて総合誌「ライフ」の表紙を飾った故・三木淳さん（日大芸術学部教授）との出会いが人生の転機だった。「写真は撮影する側の思いと撮影される側の思いを同時に伝えることができる」という三木さんの哲学を胸に刻んでいる。

（有吉　敏記者）

写真家　日大芸術学部卒。三代目・中村橋之助を中心に歌舞伎を撮り続けていることでも知られる。東京都世田谷区に妻と子ども一人。36歳

継続は力なり

市民版エイズ国際会議

今年も横浜開催

8月

県国際交流協会

会場を無償提供

昨年八月の国際エイズ会議と並行して行われた市民版会議「AIDS文化フォーラム」がことしも八月に横浜市内で開かれることが決まった。「一回限りの取り組みで終わらせたくない。引き続き交流の輪を育てていきたい」と同フォーラムに参加した非政府組織（NGO）のメンバーらが再度、組織委員会を発足させ資金集めなどを始めたことがきっかけ。先のフォーラムで会場を無償で提供した県国際交流協会がこのほど再度の参加と会場の無償提供を決めたことで開催のめどが立った。二十五日にはNGO有志らが横浜市内に集まり準備に入る。

会期は八月十一日から十三日までの三日間。期間中には横浜国際会議場で世界性科学学会、思春期学会が開かれることになっており、組織委では「両学会参加者を招くなど、国際エイズ会議の時と同様に研究者と市民との開かれた交流の場としていきたい」としている。

会場の県国際交流協会（横浜市中区山下町、産業貿易センター九階）では前回同様、会議室、研修室、図書室などを全面的に提供する。

先のフォーラムには県内のNGOなど五十八団体・個人が参加した。今回は期間は短くなるものの「エイズへの誤解や患者・感染者に対する差別や偏見をなくす」という前回の目標を引き継ぎ、医学、社会、法律、教育など幅広い視点から密度の濃いイベントを組んでいく方針だ。

組織委員会は昨年のフォーラムで会場の準備やPRなどを手弁当で切り盛りした横浜YMCA、横浜商工会議所、かながわともしび財団などによりこの春に発足した。

来年は横浜市の姉妹都市であるカナダ・バンクーバー市で国際エイズ会議が開かれるが、「姉妹都市同士での連続開催となり注目が集まる中、先に会議の舞台となった横浜で継続した取り組みが何ら行われないとしたら国際的にも恥ずかしい」（横浜商議所企画調整課長・古田正一さん）などの思いが再び開催へ向けて集まることにつながった。

組織委員長には前回フォーラムでも委員長を務めた横浜YMCA総主事・吉村恭二さんが選出された。

吉村さんは開催の背景について「国際エイズ会議は一度限りの〝お祭り〟ではなかったはずだ。『その後をどうしていくのか』という世界中からの問い掛けに答えていく必要がある」と話している。

2回目の文化フォーラム開催へ向け話し合う組織委員会のメンバー。中央は吉村委員長＝横浜YMCA

広い視野で対話重ねて

昨年夏、横浜市で開かれた国際エイズ会議と並行して行われ、「市民版エイズ会議」として話題を集めた「AIDS文化フォーラム」（組織委員長・吉村恭二横浜YMCA総主事）が十一日から十三日まで、横浜市中区の国際交流協会（産業貿易センタービル九階）を舞台に再び繰り広げられる。県が共催、横浜、川崎、横須賀市が後援する。

今夏も「市民版エイズ会議」

11～13日、横浜で文化フォーラム

第二回目の文化フォーラムは昨年八月、国際交流協会を会場に八日間にわたり開かれた。運営はすべて市民ボランティアの手で行われ、全国のNGO（非政府市民組織）が多彩な催しを展開。当初見込み（二千人）を大きく上回る約四千三百人が来場した。

吉村委員長が三日、県庁で記者会見し、行事日程を発表した。二回目の今回も教育、社会、医学など多角的な視点からエイズをとらえた三十の催しが予定されている。参加型の催しが中心だ。

十一日のトークライブ「生きる」、十二日の「感染者をどう思いますか」などにはHIV感染者も出席。会場との対話を通じて理解や交流を深める。教育に関連した催しでは、かながわ女性会議が「高校生の疑問に答えます」（十一日）と題した討論会を開催。エイズ教育の在り方を学生、教育現場の関係者との意見交換を通して模索する。またエイズ教育に取り組む市民組織「性を語る会」の北沢杏子代表（教育研究家）が「エイズ・人権・教育」をテーマに模擬授業（十三日）を行う。

エイズ文化フォーラムのプログラムについて発表する吉村委員長㊨　＝3日、県庁

電話によるエイズ相談のデモンストレーション（十二日、横浜いのちの電話）、横浜市民病院の医師と看護婦を講師とした「HIVの診療と看護のコツ」（十三日）など、現場の担当者の報告や意見を聞く場も設けられている。HIV感染者不当解雇（十一日）、薬害エイズ（十二日）などエイズに関連する社会問題も取り上げていく。

昨年に引き続き組織委員長を務める吉村委員長は来年、横浜の姉妹都市・バンクーバーで国際エイズ会議が開かれることに触れ、「横浜からNGOの連携を育てていきたい。国際会議は単なるお祭りではなかったはず。フォーラムを通してエイズへの理解を広める地道な取り組みを続けていきたい」と抱負を述べていた。

催し物などに関する問い合わせは横浜YMCA内、AIDS文化フォーラム事務局☎045（662）3721。

日程

AIDS文化フォーラムの日程は次の通り。（カッコ内は開始時間）

【11日】開会式（午後零時45分）。「企業とAIDS」、「高校生の疑問に答えます。教育の現場から」、「生きる。Positive&positive」（いずれも午後1時）。「AIDSと性の基礎知識」、「HIV AIDS'94～'95横浜YMCA」、「絵本で話そうAIDS」（午後3時半）。「HIV感染者不当解雇訴訟」、「トランスジェンダーのためのAIDS講座」、「SAY ACADEMY～夏の陣～。近ごろの若いもんは…」（午後6時）。

【12日】「女性とAIDS」（入場は女性のみ）、「エイズワークショップ」、「コンドームあれこれ」（午前10時）。「電話によるAIDS相談のデモンストレーション」、「PWAのケア・サポート」「感染者をどう思いますか。感染者とのトーク&トーク」（午後1時）。「母親が語る薬害エイズと家族」、「朗読ワークショップ」、「心とからだを感じるワーク」（午後3時半）、「薬害エイズ。知られざる大量殺戮（りく）の構図」、「H・I・Voice劇場」、「生活者としてのAIDS」（午後6時）。

【13日】「キリスト教者としてAIDSを考える」、「男と女の性教育」、「プライマリケアとAIDS」（午前10時）。「アウトリーチが語るAIDSの啓発活動について」、「HIVの診断と看護のコツ」、「エイズ・人権・教育」（午後1時）。「AIDS時代の愛と性」（午後3時15分）。「地域・在宅ケアの一環としてのバディ（伴走者）」（午後3時半）。閉会式、懇親会（午後6時）。

エイズ問題考えよう

今年も「文化フォーラム・イン横浜」

継続で情報交換の場

昨年のＡＩＤＳ文化フォーラムのプログラム

昨夏、国際エイズ会議に合わせて開かれた市民版エイズ会議「ＡＩＤＳ文化フォーラム・イン横浜」が今年も開催されることになった。今月十一―十三日の三日間、横浜市中区山下町の産業貿易センタービル九階・県国際交流協会会議室で開かれ、市民ボランティアや民間活動団体（ＮＧＯ）がさまざまな視点からエイズについて話し合う。

昨年のフォーラムは、国際エイズ会議が主に研究者対象で市民が参加しにくいことから、だれでも気軽に参加できる場を作ろうと企画された。医学から社会問題までエイズをめぐる六十コマのプログラムが用意され、八日間の期間中に、主催者の予想を大きく上回る約四千三百人が訪れた。

フォーラムは当初、昨年だけで終わる予定だったが、参加者らから「継続することに意義があるはず」「毎年開けば情報交換の場にもなる」などの声が高まり、今年も開くことになった。

エイズ診療に取り組む医師や国際交流協会職員らボランティアスタッフ十七人が組織委員会と実行委員会を構成。十二のボランティア団体が参加し、三十二コマのプログラムを開く。一般市民が対象で、入場無料。

エイズウイルス感染者の講演から、エイズや性について高校生の疑問に答えるプログラム、避妊具のあれこれ、企業に迫られているエイズ問題への対応まで、幅広く取り上げる。高校生や大学生など若い世代が主なターゲットだが、エイズ治療の現場で働く医師、看護婦を対象にしたプログラムもある。

フォーラム副実行委員長の岩室紳也・県秦野保健所医師は「エイズに対する市民の関心が薄れ、現在は教育現場ですらそれほど関心が高まっていない。フォーラムは全く知識を持っていない人でも理解してもらえる内容にしたい」と話している。問い合わせは横浜ＹＭＣＡ内フォーラム事務局（☎045・662・3721）へ。

葬儀式場 泰斎殿
葬儀の板橋
☎(335)2211㈹

11日から3日間

8月4日（金）読売新聞

8月4日（金）
東京新聞

エイズに地道な取り組み

11日からＡＩＤＳ文化フォーラム・イン横浜

アジア初の国際エイズ会議が横浜で開かれてから一年。開催時よりも薄れがちなエイズへの関心を再び高めようと、一九九五ＡＩＤＳ文化フォーラム・イン横浜」（組織委員会主催）が十一日から三日間、県国際交流協会会議室（横浜市中区山下町、産業貿易センタービル九階）で開催される。主催者は「これからは、エイズについて地道に取り組まねばいけない」と訴えている。

「ＡＩＤＳ文化フォーラム」の開催は二回目。一回目は、昨年八月の「国際エイズ会議」と同時に、一般市民向けのイベントとして今回と同じ場所で開かれた。「エイズとは」ということやエイズ関連の社会問題などを取り上げ、八日間で約四千三百人が参加した。

しかし、組織委員会の吉村恭二氏は「振り返って見れば、昨年は国際会議という大きな流れのなかで、お祭りになってしまった」という。同フォーラム実行委員の一人として参加する秦野保健所の医師・岩室紳也氏も「エイズに対する関心は昨年に高まったが、それ以後は薄れがちになっている」と、懸念を見せている。

それだけに「お祭りではなく、一つの運動として地道に取り組まなければいけない」（吉村氏）と強調。「昨年、関心を持った人でも、もう一度エイズについて考えてほしい」（岩室氏）と話している。

今年のフォーラムには感染者やその家族を含む十二団体がボランティアで参加。「社会とエイズ」「ボランティアとエイズ」「医療とエイズ」など十二ジャンルに分け、三十二のセミナーを行う。このなかには、感染者と語り合ったり、エイズに感染した子を持つ母親の講演も開かれる。

同フォーラムの入場は無料。問い合わせは同フォーラム事務局＝電045（662）3721。

幅広くAIDS考える

8月5日（土）
毎日新聞

横浜でフォーラム

11日から

予防・治療や感染者の人権など

エイズの予防・治療や感染者の職場での不当解雇、人権問題などさまざまな角度から市民や専門家、感染者が共に考える「1995 AIDS文化フォーラムin横浜」が十一日から三日間、横浜市中区の産業貿易センタービル九階「県国際交流協会」会議室で開催される。吉村恭二・横浜YMCA総主事や川本譲次・横浜商工会議所副会頭ら七人で構成する組織委員会の主催で今年で二回目。テーマは「ともに生きる」。三日間の講演・ワークショップなどのプログラムは三十一に上り、エイズやその感染者に対する真の理解を目指す。

三日間の主なスケジュールは午前十時から午後七時半まで、A、B、Cの三会場ごとに、一コマ二時間一日計三―四コマが開催される。初日はC会議室で午後一時から二時間、「生きる」をテーマに感染者のトークと感染者への質問を受け付ける。二日目の十二日はA会議室で午後三時半から二時間、「母親が語る―薬害エイズと家族」と題し、薬害によって感染した子を持つ母親が、感染者の苦しみや家族の苦悩を語る。

このほか、教育的観点から「教師のための模擬授業『エイズ・人・教育』」（十三日午後一時―同三時）や、エイズによる差別、同性愛差別問題に取り組んでいる市民グループ「エイズアクション」による提言（同日午後三時半―同五時半）など、多様な角度からとらえた三十一プログラムが、ボランティア団体などにより開催される。

参加希望者は当日直接会場へ。入場無料。問い合わせは横浜YMCA内「1995 AIDS文化フォーラムin横浜事務局」（☎045・662・3721）

エイズ理解 継続訴える

8月11日（金）　朝日新聞

今日から横浜で報告会

エイズへの理解を広げるための「AIDS文化フォーラムin横浜」が十一日から三日間、横浜市で開かれる。十二のボランティア団体の協力で、感染者との対話や医師の報告、教育現場での取り組み方など、三十一の企画を予定している。組織委員長の吉村恭二・横浜YMCA総主事は「一時的に関心を高めるだけでなく、継続的で地道な運動にしていきたい」と話している。

会場は、同市中区山下町の産業貿易センタービル九階の県国際交流協会会議室。問い合わせは横浜YMCA内の事務局（〇四五―六六二―三七二一）へ。

エイズ、偏見なくして

感染者の姿 写真で紹介

15日まで横浜

HIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染者の姿とメッセージを紹介する写真展「エイズを生きる」と、世界のエイズポスター展が十五日まで横浜駅西口近くの県政総合センターで開かれている。県保健予防課の主催。十一日から横浜市内で始まる「エイズ文化フォーラム」の協賛イベント。

写真展ではワシントン州立大学留学中の写真家・土橋正之さんが撮影、取材したアメリカ在住のHIV感染者の姿をパネル二十枚で紹介している。ポスター展では国内外のエイズ予防啓発ポスター二百枚を展示している。

「エイズを生きる」は土橋さんがこのほど出版したフォトドキュメント集（岩波書店、一四〇〇円）のタイトル。本には三十七人のHIV感染者が登場。感染の事実を周囲に明かすまでの迷いや苦しみ、感染の事実を受け止め生き抜こうとする姿を肉声を交えて伝えている。写真展では本の中の登場人物をピックアップし紹介した。

県保健予防課によると会場には中学、高校生の姿が目立つという。夏休みの自由研究のため訪れた横浜市内の私立中学の女性グループは「感染者が普通の人とまったく変わらないということを写真やメッセージを通じて感じることができた」と話していた。

HIV感染者の写真やメッセージ、世界のエイズポスターが展示され中学、高校生らでにぎわう会場

＝県政総合センター

8月11日（金）
神奈川新聞

「コンドームを女性が持ち歩くことには抵抗感がある」…

エイズ国際フォーラム

フォーラム2日目

教育、社会、医学などさまざまな分野からエイズについて考えようと、横浜市中区の県国際交流協会（産業貿易センタービル九階）で開かれている「第二回AIDS文化フォーラム」は二日目の十二日も、「心とエイズ」「文化とエイズ」などをテーマに、さまざまな催しが繰り広げられた。

避妊具に理解

県内の高校生・大学生が中心となってエイズ問題に取り組んでいるグループ「SAYネットワーク」（斉藤はじめ会長＝産能大三年）は、コンドームについてきちんと理解してもらおうと「コンドームあれこれ」を開催。女子高校生から主婦まで約百人が来場した。

まず、同グループの顧問をしている秦野保健所（泌尿器科）の岩室紳也医師（三九）が「コンドームはエイズ予防には欠かせないのに、まだ根強い抵抗感がある。きちんと理解してほしい」とあいさつ。その後、コンドームを実際に膨らませるなどして、基礎知識を学んだ。コンドームには約四十ccの空気が入るとの説明に来場者はびっくり。

岩室医師（右から2人目）からコンドームの正しい装着法を学ぶ参加者ら＝県国際交流協会

また、フリーディスカッションでは、「SAY」のメンバーがコンドームを初めて手にしたときのエピソードを披露。会場からは「買いづらいのは、隠れて悪いことをしているという意識があるからではないか」「女性が持ち歩くことには、遊び人などと思われそうで抵抗がある」などの意見が出た。

最後に岩室医師による装着講習会が開かれ、「つめを立てない」などのアドバイスを来場者らはメモを取りながら聞いていた。

SAYネットワークは、前日夜にも若い世代の性行動や考えをクイズやコントで表現し、問題点を話し合った。

アドバイザーとして参加した岩室医師は「若い人はセックスがHIV（ヒト免疫不全ウイルス）の感染経路であることを忘れないで」と強調。参加者からは「ノーならノーと、自分の性行動は自分で決めていくべき」などの意見が出された。

過激なアダルトビデオを題材にした討論では、「若者はこれがセックスだと思い込み、女性の心の痛みなど理解しなくなる」「アダルトビデオで性教育が補われているとすると問題が大きい」などの指摘が相次いだ。

「血液製剤感染は殺人」国の責任追及する声も

「女性」を意識

女性のみを対象に開かれたワークショップ「女性とAIDS」には約百人が参加。川崎市衛生局の吉永陽子医師とともに、参加者同士がエイズに関する疑問点などを話し合う形で進められた。

「検査を早く受けるメリットは？」「コンドームは最初から着けろと言うけど、最初っていつ？」などリラックスした雰囲気で活発に質問や意見が交わされた。

吉永医師は「すべての女性に感染の心配がある。女性が男性から感染する率はその逆より高い」と話し、「私たちは膣（ちつ）を持っている女性。そのことを意識し、共有し、かけがえがないのだということを考え直してみよう」と呼び掛けた。

エイズがごく普通の家庭に入り込み、女性の感染者が今後増加することが予想されている。九州や東北からも参加者を集めたこの会からは「これからは女性としての性を真剣に考えたい」などの感想が出された。

一緒に闘いを

血友病の治療に用いた輸入非加熱濃縮血液製剤によってHIVに感染した息子の人権を守りたい―。今年三月に実名で訴訟に踏み切った東京都の川田悦子さんと石川県の岩崎和美さんの講演会も開かれ、約百五十人が集まった。

薬害エイズとの闘いを語った川田さん（中央）と岩崎さん㊨＝県国際交流協会

川田さんは二男（一九）がHIVに感染し、現在入院中。岩崎さんは二年前、十九歳の息子を亡くしている。

川田さんは、血液製剤による感染は「殺人」であるとして「被害者が隠れるようにして生きているのはおかしい。加害者である厚生省は謝りもしなければ責任も問われていない。私たちに同情するのではなく、闘いに一緒に参加してください」。また、岩崎さんは「美大に進学することを夢見ていた息子の十九年間の頑張りを、（会場に飾られた）息子の絵を見ることで感じ取ってほしい」と訴えていた。

市民の関心実感 3日で2200人参加

エイズ文化フォーラム閉幕

「来年も開催を」

30余りのプログラムに2200人が参加したエイズ文化フォーラム。立ち見の出るプログラムも相次いだ＝13日、北沢杏子さんの高校生模擬授業

横浜市中区の県国際交流協会を舞台に三日間にわたり開かれた市民版エイズ会議「エイズ文化フォーラム」（委員長・吉村恭二横浜ＹＭＣＡ総主事）が十三日、閉幕した。会期中の参加者は二千二百人を数え、昨年夏の国際エイズ会議を機に、引き続き市民の間にエイズ問題への関心が高まっていることをうかがわせた。運営を無償で支えた非政府組織（ＮＧＯ）や市民ボランティアは「ここまで反響があるとは思わなかった。来年もぜひ、開催したい」と喜んでいる。

フォーラムは昨年夏に横浜市で行われた国際エイズ会議と並行して開かれた。専門家向けの同会議とは違い全国のＮＧＯが市民向けの手づくりイベントを繰り広げた。八日間で四千三百人が来場している。

今回は「前回のフォーラムで生まれた連携を育て、エイズ問題への息の長い取り組みを続けたい」と集まった県内のＮＧＯ有志がこの春、委員会を立ち上げた。国際会議が行われ、エイズへの関心が高まっていた昨年と違い資金集めに苦心。しかし国際交流協会が今年も会場を無償で提供することを決めたことから開催のめどが立った。

期間中に組まれたプログラムは医学、社会、教育など参加型を中心に三十一。いずれも七十人前後が出席する盛況ぶりだった。最終日の十三日に行われた性教育研究家・北沢杏子さんの「高校生向け模擬授業」は百人入れる会議室が満員となり、立ち見や床に座り込む参加者も出た。その間、廊下には同会議室で行われる次の催しを待つ人たちの行列ができた。

昨年のフォーラムでも授業を行った北沢さんは「ＮＧＯが自由に発表でき、市民も関心を高めることができる場がことしも設けられてよかった。市民の関心の高さも実感できた。来年も開催されるのならぜひ、協力したい」と話している。

また昨年のフォーラムで事務局長を務めた全国ＮＧＯ「エイズアクション」の南定四郎代表は「中央に頼らず地元の力でここまでやれたのは大きい。エイズへの関心を高め理解を深めてもらうには最良の催し。全国の先例となる取り組みだけに定着を願っている」と来年以降、引き続いての開催に期待を寄せている。

地域で生きるケアを

開業医が連携の呼び掛け

「エイズ文化フォーラム」最終日の十三日は、医療機関などのネットワークづくりについて論議する「プライマリーケアとＡＩＤＳ」（ＨＩＶと人権・情報センター東京支部）、性教育、人権についてのトーク、討論会などが開かれた。

地域の身近な病院・医院と、保健所、行政、専門病院などとの連係プレー、ネットワークづくりは、昨年開かれた同じワークショップで提案された。

しかし同センターでボランティア活動をしているあるＨＩＶ感染者は無症候の感染者までもが、いまだ地域で診てもらえず、横浜や東京の著名な病院に集中している現状を紹介。「私自身、告知されて七年近くになるが、免疫力のチェックのための採血と問診で病院に月に一度通うだけで済んでいる。これは十分、地域でできること」と訴えた。

一つのモデルとして福岡県の開業医は、感染者を受け入れ始めて約一年半の取り組みを報告。関係各所との連携の難しさを披露しつつも「感染者に限らず人が地域で生きるために地域が支えるのは最も自然な形」とし、「積極的に身近な医師・診療所が、感染者を受け入れていることを広報する（医師からのカミングアウト）。そうしなければ感染者自身の顕在化はない。開業医が手を携えて立ち上がろう」などと呼び掛けた。

街頭での啓発活動を「アウトリーチ」と呼び実践している市民グループ、ＡＩＤＳケア・プロジェクトは「アウトリーチが語るＡＩＤＳの啓発活動」と題して、その方法論を紹介した。

同グループはメーンの活動である電話相談のほかに、感染予防などを目的に都内各地の街頭で月に二度、情報提供やコンドームを配布。同性愛者が集まる場所ではエイズへの意識が高くなっていることや、時期、年齢層、性別などにより配り分けることの有効性などを報告した。

配布時にイベント的な要素を持たせるなどテクニックも披露し、「アウトリーチは個人的にもできる草の根の活動。少しずつでも広がれば」と話していた。

8月12日（土）　神奈川新聞

米国の感染者と対談

横浜　市民版エイズ会議

性教育の問題も指摘

昨年夏、横浜市で開かれた国際エイズ会議と並行して行われ「市民版エイズ会議」として話題を集めた「AIDS文化フォーラム」（組織委員長・吉村恭二横浜YMCA総主事）の第二回目が十一日から、横浜市中区の県国際交流協会（産業貿易センタービル九階）を舞台に始まった。十三日までの三日間、教育、社会、医学などさまざまな分野からエイズについて取り上げていく。県が共催、横浜、川崎、横須賀市が後援する。

初日の十一日は、HIV（ヒト免疫不全ウイルス）感染を周囲に明かし、エイズの予防や偏見をなくす運動に取り組んでいる米国人ディスクジョッキー、パトリック・ボン・マリートさんのトークライブ、「高校教育の現場から」（かながわ女性会議主催）と題した討論会、HIV感染者に対する不当解雇問題についての報告会などが行われた。

パトリックさんは秦野保健所の岩室紳也医師と対談、来場した約百人とも意見を交換した。この中で「一人ひとりに打ち明けていくのは勇気が必要だった。しかし、打ち明けたことで気持ちも楽になり真の家族と友人を得ることができた」などと心情を明かした。そして「自分だけでなく周囲のためにも進んで検査は受けるべきだ」と保健所で実施されている匿名無料検査の利用を呼び掛けた。

「高校教育の現場から」の討論会には教師、生徒、父母ら六十人余りが参加。「性教育では先生が恥ずかしがる。肝心なところでは口どもるなど十分な授業ができていない」（女子高校生）などエイズ教育の下地となる日本の性教育の問題点を指摘する意見が相次いだ。

吉村委員長は「フォーラムを通してこれまでの地道な活動をアピールしてほしい」と運営に参加したNGO（非政府組織）を激励した。

今回も前回同様にNGO有志が無償で運営を引き受けており、参加型を中心とした合計三十一のプログラムが組まれている。十二日はエイズ問題に取り組む県内大学生らのグループ「SAY NETWORK」がコンドームを紹介するイベント「コンドームあれこれ」（午前十時から）を開催。HIV感染者との対話集会、「横浜いのちの電話」主催の電話によるエイズ相談のデモンストレーション（ともに午後一時から）なども繰り広げられる。薬害エイズについて被害者、家族らが語る報告会（午後三時半と六時から）なども。

また米国のHIV感染者の姿を伝える写真家・土橋正之さんの写真展「エイズを生きる」も期間中、会場内で開かれている。

催し物などに関する問い合わせは横浜YMCA内、AIDS文化フォーラム事務局☎045（662）3721。

開幕した第2回AIDS文化フォーラム。初日のパトリックさんのトークライブには約100人が集まった　＝県国際交流協会

8月12日（土）　読売新聞

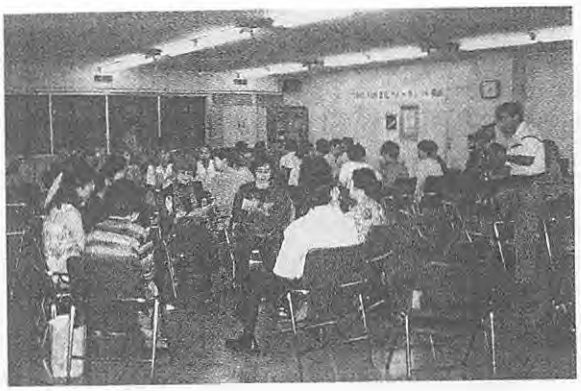
市民版エイズ会議開幕

絵本使った入門劇も

市民版エイズ会議「AIDS文化フォーラム・イン横浜」が十一日、横浜・産貿センター九階の県国際交流協会会議室で始まった。県内はもとより九州、関西など全国から約五百人が参加する盛況。昨夏に続き二回目で、NGO（民間活動団体）やボランティアが取り組む地道なエイズの理解活動の成果が、十三日まで三日間にわたり発表される。

十一日午後開かれたフォーラム「絵本で話そうAIDS」は、横浜、川崎に住むアルバイト平野理恩さん（三七）と主婦森孝子さん（四三）が企画した。手作りの布製絵本を使ったユニークな免疫システム入門劇。エイズウイルスをかわいい自家製キャラクター人形に置き換え、なぜエイズにかかるかを子供でも分かるように説明した。

フォーラムは入場無料。日程の詳細は事務局（☎045・662・3721）まで。



'95AIDS文化フォーラム・イン横浜

一般市民特に高校生や大学生などの若い層を対象に、8月11日から13日にかけて、横浜市中区の産業貿易センターの県国際交流協会会議室で、エイズに対する理解を求めるフォーラムが開かれ、約2,200人が参加しました。感染者やサポートするボランティアの体験発表、医療、心、文化、教育、女性、人権などの多彩な視点から熱心な討論が繰り広げられました。期間中の会場運営は、200人のボランティアの熱意によって支えられましたが、エイズ問題に取り組む県民の意識の高揚が感じられる催しでした。

月刊かながわ10月号

AIDS/HIVへの無理解・無関心を打ち破りたい！

「1995 AIDS文化フォーラムin横浜」開催

１階の展示ホールでは，メモリアル・キルト・ジャパンと横浜市共催の「'95メモリアルキルトとの新たな出会い」が開かれていた．エイズに対しての正しい認識を広め，この病に苦しむ人をこれ以上増やすことのないように，との願いが込められたメモリアルキルトは90 cm×180 cmの大きさ．

あちらこちらに配された展示にも多くの人は足をとめた．会場では中学・高校生をはじめ，若い人たちの姿が目立った．

小さなミシンを持ってきて，会場の片隅でテディベアを作る中沢さん．患者さんの安らぎになればと．「昨年と今年ではエイズに対する人々の認識は大きく変わったと思います．少なくとも，エイズは死につながる恐ろしい病気という考えは間違っているというように」

8月前半の横浜は，昨年の国際AIDS会議を一時の「お祭り」とせず，AIDSへの正しい理解と差別・偏見をなくすために継続的に取り組む，ポスター展やコンサート等の多彩な催しで盛り上がった．その1つ「1995 AIDS文化フォーラムin横浜」は，8月11～13日，同組織委員会の主催で(共催：神奈川県，後援：横浜市，川崎市，横須賀市)開かれた．このフォーラムは"ともに生きる"をテーマに，AIDS理解のためのネットワークの充実を目指したNGOが「心とAIDS」「セクシュアリティとAIDS」等の12ジャンル・30のプログラムを行ない，関心を持つ多くの人が集まった．(また，関連行事である第12回世界性科学学会についてはP859参照)

プログラムの1つ「感染者をどう思いますか？－感染者とのトーク&トーク」は「普段語れないことを，本音を語り合おう」とPWA/H(Pepole With AIDS/HIV)の新井康和さん(愛称ジミー)とPWA/Hではないが一緒に生活している加藤孝さんによって進められた．明るく，にこやかな2人だが「生活のすべての場所でカミングアウト(公表)できる状況ではない」という．たとえ表面には出なくとも，何とはなしに存在するPWA/Hへの偏見を感じさせる．また，PWA/Hの中でも血液製剤と性的接触という感染経路による差別があることについて，ジミーさんは「病気は病気じゃないの？」と訴えた．「病気」ということに，それがどんな理由でなろうと，またどんな病気であろうと，違いはあるのだろうか？という非常に重い投げかけであった．

また，ジミーさんは「地域によって生活保護の額が違うのはどうして？それはどう

同じ「目線で」と演壇を隅に寄せ，「直接語りかけることで少しずつ理解してもらえたら」と終始「一緒に話そうよ」と呼びかけると，会場から多くの発言があった．「風邪などのウィルスがあるかもしれない中，ありがとう」という会場からの声に，新井さん(中央右)は「こちらこそ，恐がらずに来てくれて，ありがとう」と返した．

「電話によるAIDS相談のデモンストレーション－ロールプレイによる」は横浜いのちの電話のスタッフが担当した．相談電話を参加者の中の1名が出て受け答えする．他の参加者は，自分だったらどう答えるだろうと考えながら周りで聞いている．慰めや同情でなく，かけ手の気持ちにどれだけ添っていけるか「相手の感じている不安な気持ちを受け止め，心と心を通い合わせ，相手との関係づくりをしていくことが大事なこと」という講師の有田さんの言葉に納得する．

週刊誌が神戸の女性患者について報道を始めた'87年1月からのエイズパニックは，川田さんにとって忘れられない出来事である．日本でのマスコミの報道のあり方について，取材する側として考えさせられることが多かった．

HIV感染者の生活という視点から，社会的コストを増大させ納税者である自分の不利益となるつまらない差別の馬鹿らしさを訴える磐井さん．

H・I・Voiceによる「朗読」は，静かなBGMに乗っていくつものやりとりが同時進行する形で，患者や家族の思いが語られた．静かに語られるリアルな思いが聴衆の涙を誘う．朗読する方も，何度読み込んでいても，目頭を押えていた．

やって決まるの？また，自治体によって難病の認定内容が違っているのはなぜ？住みたい所に住めないじゃない，医療や福祉に関わる人に調べてほしい」と本誌に語った．

川田悦子さん(東京HIV訴訟)，岩崎和美さん(大阪HIV訴訟)による「母親が語る－薬害エイズと家族」は，入場制限をするほど大勢の参加者で埋まった．2人の前に飾られた絵は昨年，21歳で亡くなった岩崎孝祥さんの作品．1989年，大阪と東京で提訴されたHIVの両訴訟は国と製薬会社5社を相手に闘かわれており，現在最終局面に入っている．

川田さんは話の終わりに「投げやりな気持ちからは何も生まれない．薬害エイズの患者とともに，同情でなく，自分たちの問題として一緒になって怒ってほしい．闘ってほしい」と参加者に訴えた．

「生活者としてのAIDS」では，ソーシャルワーカーの磐井静江さん(東京都立駒込病院)が，収入・預金・病状等の経過を時系列的に並べた事例をもとに，HIV感染後の生活の進め方を具体的に語った．

磐井さんに，講演後「前向きにやっている看護職」に望むことを尋ねたところ「患者さんは基礎的な技術が上手にできることをまず望んでおり，その上で処置を通じての心のケアを求めているように思う．忙しいでしょうけど，看護本来の業務を丁寧に，大切に」と述べた．

今回のフォーラムを紹介して下さった岩室伸也医師(神奈川県立厚木病院)は「看護婦さんががんばるから，医師もがんばって取り組まざるを得ない．そういう雰囲気を他の病院でも作ってほしい」と述べた．

(文・写真/本誌)

「1995 AIDS文化フォーラム in 横浜」実施報告書

発行日　1996年 3月 1日

発　行　「1995 AIDS文化フォーラム in 横浜」組織委員会

編　集　「1995 AIDS文化フォーラム in 横浜」報告書作成委員会

事務局　〒231 横浜市中区常盤町1-7 横浜YMCA内
ワールド・コミュニケーション・センター
TEL 045-662-3721　FAX 045-651-0169

ともに生きる

市民が作るAIDSフォーラム。あなたからのメッセージをひとりでも多くのひとに。